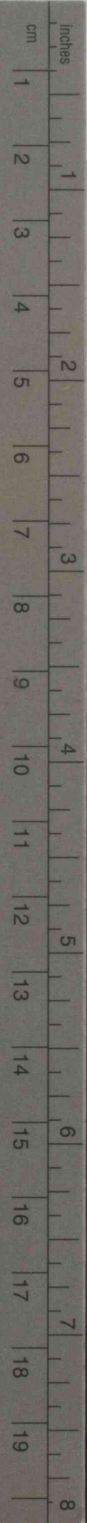
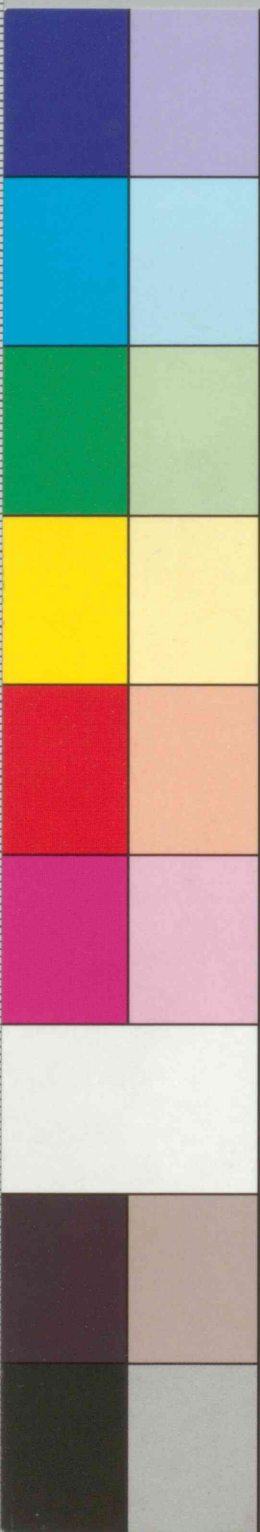


改新文典 上級用

375.9
Hal9
資料室



Kodak Color Control Patches



Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

41850

教科書文庫

4
815
41-1939
200030
2312

514
700



文部省檢定濟
昭和十四年一月二十六日 中國語文科學用

資料室

3959
Ha19

東京帝國大學教授
文學博士 橋本進吉著

改新文典 上級用

東京 富山房發兌



一 例 言

一 本書は昭和十二年改正の中學校教授要目に準據し、中學校第三學年用の國文法教科書として編じたものであります。

一 本書は昨年公にした初年級用、改制新文典に於て、口語文法の大要を説いたのを承けて、主として文語文法の概要を述べたものであります。

一 本書は、口語文法の知識を基礎にして文語文法に進む方針を執り、全體の組織は初年級用新文典とほぼ同一にしましたが、第一篇に於ては、各品詞について概説して、既修の知識を整理し、確實にすると共に、文語文法もその原則に於ては、口語文法と同様である事を知らしめ、第二篇に於ては、品詞及び活用について口語と文語との異なる所を主として説明し、第三篇に於ては、文語の品詞の轉成と語構造の大要を説き、第四篇に於ては、文語に於ける文の成分について、口語との差異に注意しつつ述べました。文の構造及び文の種類については、初年級用新文典に於ては説き及ばなかつた爲、第五篇に於て口語と文語とを

併せてその概要を説きました。かやうにして、文語のみならず口語についても、文法組織の全體に亘つて、一通りの知識を得る事が出来るやうにしました。本書は、國語の文法組織について出来るだけ明瞭な知識と透徹した理解とを與へる爲に、幾分説明を委しくしました。それが爲、多少分量が多くなりましたが、しかし、その大半は既に口語文法に於て學んだと同様の事項でありますから、分量の割合には多くの時間を要することはなからうと思ひます。それでも猶時間の足りない場合を顧慮して、文字の大小によつて輕重を分ち、場合に應じて適宜取捨するに便しました。猶、第二篇と第四篇とは最大切な部分で、缺く事は出来ませんが、その他の諸篇殊に第三篇は、時間の都合によつては簡略にし、また、止むを得ない場合には、一部分又は全部を省いても宜しからうと思ひます。

昭和十三年十月

改制 新文典 上 濫用

目次

第一篇 品詞總説……………一

第一章 總説……………一

第二章 品詞概説(一)……………四

第三章 品詞概説(二)……………九

第二篇 文語の品詞……………一五

第四章 文語の名詞・代名詞……………一五

第五章 文語動詞の活用(一)……………一八

第六章 文語動詞の活用(二)……………二〇

目次

第七章 文語動詞の活用(三)……………二七

第八章 文語動詞の活用(四)……………三三

第九章 文語形容詞と形容動詞の活用……………三八

第十章 文語用言の音便形……………四三

第十一章 文語の副詞・接續詞・感動詞……………四六

第十二章 文語助動詞の種類と活用(二)……………五〇

第十三章 文語助動詞の種類と活用(三)……………五四

第十四章 文語助動詞の種類と活用(三)……………六三

第十五章 文語の助詞(二)……………六九

第十六章 文語の助詞(二)……………七七

第三篇 品詞の轉成と語の構造……………八四

第十七章 品詞の轉成……………八四

第十八章 複合語……………八七

第十九章 接頭語・接尾語……………九一

第四篇 文の成分……………九五

第二十章 文と文の成分……………九五

第二十一章 主語と述語……………九八

第二十二章 修飾語……………一〇四

第二十三章 獨立語……………一二二

第二十四章 文の成分の位置と省略……………一二七

第五篇 文の構造と文の種類……………一三一

第二十五章 文の構造と節……………一三三

第二十六章 文の種類……………一三三

目次

補充問題……………四

……………一一〇

附表

- 第一表 動詞活用表
- 第二表 形容詞活用表
- 第三表 形容動詞活用表
- 第四表 助動詞活用表
- 第五表 助動詞活用表
- 第六表 助動詞活用表
- 第七表 助動詞活用表
- 第八表 助動詞活用表
- 第九表 助動詞活用表
- 第十表 助動詞活用表
- 第十一表 助動詞活用表
- 第十二表 助動詞活用表
- 第十三表 助動詞活用表
- 第十四表 助動詞活用表
- 第十五表 助動詞活用表
- 第十六表 助動詞活用表
- 第十七表 助動詞活用表
- 第十八表 助動詞活用表
- 第十九表 助動詞活用表
- 第二十表 助動詞活用表
- 第二十一表 助動詞活用表
- 第二十二表 助動詞活用表
- 第二十三表 助動詞活用表
- 第二十四表 助動詞活用表
- 第二十五表 助動詞活用表
- 第二十六表 助動詞活用表
- 第二十七表 助動詞活用表
- 第二十八表 助動詞活用表
- 第二十九表 助動詞活用表
- 第三十表 助動詞活用表
- 第三十一表 助動詞活用表
- 第三十二表 助動詞活用表
- 第三十三表 助動詞活用表
- 第三十四表 助動詞活用表
- 第三十五表 助動詞活用表
- 第三十六表 助動詞活用表
- 第三十七表 助動詞活用表
- 第三十八表 助動詞活用表
- 第三十九表 助動詞活用表
- 第四十表 助動詞活用表
- 第四十一表 助動詞活用表
- 第四十二表 助動詞活用表
- 第四十三表 助動詞活用表
- 第四十四表 助動詞活用表
- 第四十五表 助動詞活用表
- 第四十六表 助動詞活用表
- 第四十七表 助動詞活用表
- 第四十八表 助動詞活用表
- 第四十九表 助動詞活用表
- 第五十表 助動詞活用表
- 第五十一表 助動詞活用表
- 第五十二表 助動詞活用表
- 第五十三表 助動詞活用表
- 第五十四表 助動詞活用表
- 第五十五表 助動詞活用表
- 第五十六表 助動詞活用表
- 第五十七表 助動詞活用表
- 第五十八表 助動詞活用表
- 第五十九表 助動詞活用表
- 第六十表 助動詞活用表
- 第六十一表 助動詞活用表
- 第六十二表 助動詞活用表
- 第六十三表 助動詞活用表
- 第六十四表 助動詞活用表
- 第六十五表 助動詞活用表
- 第六十六表 助動詞活用表
- 第六十七表 助動詞活用表
- 第六十八表 助動詞活用表
- 第六十九表 助動詞活用表
- 第七十表 助動詞活用表
- 第七十一表 助動詞活用表
- 第七十二表 助動詞活用表
- 第七十三表 助動詞活用表
- 第七十四表 助動詞活用表
- 第七十五表 助動詞活用表
- 第七十六表 助動詞活用表
- 第七十七表 助動詞活用表
- 第七十八表 助動詞活用表
- 第七十九表 助動詞活用表
- 第八十表 助動詞活用表
- 第八十一表 助動詞活用表
- 第八十二表 助動詞活用表
- 第八十三表 助動詞活用表
- 第八十四表 助動詞活用表
- 第八十五表 助動詞活用表
- 第八十六表 助動詞活用表
- 第八十七表 助動詞活用表
- 第八十八表 助動詞活用表
- 第八十九表 助動詞活用表
- 第九十表 助動詞活用表
- 第九十一表 助動詞活用表
- 第九十二表 助動詞活用表
- 第九十三表 助動詞活用表
- 第九十四表 助動詞活用表
- 第九十五表 助動詞活用表
- 第九十六表 助動詞活用表
- 第九十七表 助動詞活用表
- 第九十八表 助動詞活用表
- 第九十九表 助動詞活用表
- 第一百表 助動詞活用表

目次終



改新 文典 上級用

橋本進吉著

第一篇 品詞總說

第一章 總說

口語
文語
口語の文法と
文語の文法と

(一) わが國語には、談話に用ひる言語と、文字で書く時に用ひる特別の言語とがある。談話に用ひる言語を口語といひ、文字で書く時に用ひる特別の言語を文語といふ。

(二) 口語と文語とは、その文法が違つてゐる。本書では、主として文語の文法を説く。

(三) 庭に池がある。(口語)
山は雲に隠れたり。(文語)

第一章 總說

文
語單語

右のやうに、一つの纏まつた思想を言ひ表はす一つ々きのことばを文といひ、一つ一つの思想を表はすことばを語又は單語といふ。文は語から成立つ。

連語

〔四〕「池が」「山は」「庭に」「雲に」「隠れたり」「雲に隠れたり」のやうに、語の結合したもので、或意味を表はすが、まだ一つの纏まつた文にならないものを連語といふ。

附屬する語

獨立する語

〔五〕單語の中、庭に池がある、「山は雲に隠れたり」の「に」「が」「は」「たり」のやうに、常に他の語に附屬し、それだけ切り離しては用ひられない語を附屬する語といふ。「庭」「池」「ある」「山」「雲」「隠る」のやうに、それだけ獨立して用ひる事の出来る語を獨立する語といふ。

活用語

〔六〕「ある」「口語」「隠る」「文語」といふ語は、あらう「あります」「あれば」「隠れたり」「隠るる時」「隠るれども」のやうに、形が變る。かやうに、場合に應じて語形の變化する語を活用語といふ。その語形變化

活用

語尾

語幹

を活用といふ。語が活用する場合には、語の終の部分だけ變化するのが普通である。その變化する部分を語尾といひ、變化せぬ部分を語幹といふ。

●語によつては、語幹と語尾とを區別する事が出来ないものもある。こきくくる。くれこよ(來)みみるみれみよ(見)など。

〔七〕

水が流れる。(口語) 花咲く。(文語)

色がきれいだ。(口語) 松青し。(文語)

あれは川です。(口語) 日本は神國なり。(文語)

述語
主語

右の「流れる」「咲く」「きれいだ」「青し」「川です」「神國なり」のやうに、文の中で、どうするか「どんなであるか」「何であるか」を述べる(敘述する)語を述語といひ、「水が」「花」「色が」「松」「あれは」「日本は」のやうに、述語に對して、何がさうするか、何がさうであるか、又は何が何であるかを示す語を主語といふ。

〔八〕 きれいな水が さら／＼と流れる。(口語)

赤き花 美しく咲く。(文語)

右のきれいな「さら／＼と」、赤き「美しく」は、「水」「流れる」「花」「咲く」に附いて、「どんな水か」「どんなに流れるか」「どんな花か」「どんなに咲くか」を表はしてゐる。このやうに、他の語に附いて、その意味を委しく定める事を修飾するといひ、他の語を修飾する語を修飾語といふ。

修飾語

第二章 品詞概説(一)

〔九〕 語を文法上の性質によつて分類したものを品詞といふ。本書では、品詞を左の九種とする。

品詞

- 名詞
- 代名詞
- 動詞
- 形容詞
- 副詞
- 接續詞
- 感動詞
- 助動詞
- 助詞

名詞

〔一〇〕 「花」「鳥」「心」「春」「進歩」「東京」「楠正成」の如く、事物や地名や人名などを表はす語を名詞といふ。

數詞

〇「一」「三」冊のやうに數を表はす語も、「第一」「五號」のやうに數によつて順序を表はす語も名詞である。之を特に數詞といふ事がある。

代名詞

〔一一〕 「私」「彼」「これ」「そこ」「かしこ」「そなた」「どちら」の如く、人事物場所方角等の名をいふ代りに、之を直接に指していふ語を代名詞といふ。

體言

〔一二〕 名詞・代名詞は、共に活用^〇の無い語であつて、主語^〇になる事^〇の出来るものである。之を總括して體言^〇といふ。

動詞

〔一三〕 「飛ぶ」「見る」「思ふ」「有り」の如く、事物の動作存在を述べる語を動詞といふ。

動詞には活用がある。

- 飛ばない
- 飛びます
- 飛ぶ
- 飛ばば
- (口語)

形容詞

見ない 見ます 見る 見れば (口語)
 思はず 思ひき 思ふ 思へば (文語)
 有らず 有り 徳有る者 有れば (文語)

〔二四〕「堅い」「涼しい」「面白し」「楽し」の如く、事物の性質有様を述べる語を形容詞といふ。

形容詞には活用がある。

堅く 堅い 堅ければ (口語)
 涼しく 涼しい 涼しければ (口語)
 面白く 面白し 面白ければ (文語)
 楽しく 楽し 楽しき者 楽しければ (文語)

〔二五〕「面白から(う)」「立派だ」「平かなり」「堂々たり」などは、形容詞と同性質の語であつて、活用がある。しかし、その活用は形容詞と同じでない。

形容動詞
用言

面白からう 面白かつた (口語)
 立派だらう 立派だつた 立派だ 立派な事
 立派なら (口語)

面白からむ 面白かりき 面白かるべし (文語)
 平かなりむ 平かなり 平かなる道
 平かなれども (文語)

堂々たらむ 堂々たり 堂々たる議論
 堂々たれども (文語)

かやうな語を形容動詞といひ、之を特別な形容詞と見る。

〔二六〕動詞・形容詞・形容動詞もは、共に活用のある語であつて、單獨で述語になる事が出来るものである。之を總稱して用言といふ。

練習題

次の文の傍線を附けた語の品詞をいへ。全詞(1)動詞(2)形(3)形動(4)

- 一 日本が風光明媚な國であるといふ事は、外國觀光客のひとしく認めるところである。(口語)
- 二 たゞその規模の小さいのは地理地質によるもので、何ともしかたがない。(口語)
- 三 六歳になる子供は、傷ましくも大患の床に横たはつてゐた。(口語)
- 四 母親の眞心こめた必死の看護も效なく、死の恐ろしい冷い手は、既にその身邊近く迫つてゐた。(口語)
- 五 枕頭の薬瓶や検温器を載せた盆の側には、人形や繪雜誌などが空しくころがつてゐる。(口語)
- 六 朝顔を植ゑたる日より芽さすを待つは、子を育つる親の心もかかやと思ひ知らる。

七 予は秀吉が偉人たりしと共に、また決して無學の一武邊にあらざりしを斷言し得るを喜ぶ。

八 從來かれの人物、事業を世に紹介したりしは眞書太閤記繪本太閤記などなり。

九 然るに、惜しいかな、これ等の書は、武人としての秀吉のみを描きて、他の方面は殆ど全く閑却したるが如し。

一〇 村人に道を聞けば、かなたに見ゆるは湯本の宿にして、これより箱根路となり、上り四里に下り四里、山を下ればやがて三島に至る。など、いと懇なり。

第三章 品詞概説(二)

〔二七〕 確かに「細かに」「大層」「甚」「丁度」「きつと」「多分」「稍」「いと」「蓋し」などの如く、用言を修飾する語を副詞といふ。

副詞は、活用の無い語で、主語にならないものである。

副詞

接續詞

〔一八〕「及び」「並に」「さうして」「しかし」「されば」「さるを」「しかるに」の如く、前のことばを受けて後に結び附ける語を接續詞といふ。
 接續詞は、活用の無い語で、主語にも述語にも修飾語にもならない。又他の語に修飾せられる事も無い。

感動詞

〔一九〕「あゝ」「おや」「あな」「あはれ」のやうな、感動の情を表はす語や、はい」「いいえ」「否」「おい」「やよ」のやうな、應答や呼掛けの語を感動詞といふ。

感動詞は、活用の無い語で、それだけで言ひきりになつて、一つの文と同様なものになる事が出来るものである。主語・述語・修飾語になる事なく、又他の語に修飾せられる事もない。

〔二〇〕(一)「考へない」「歩いた」「思ふまい」「讀みけり」「勤むべし」の「ない」「た」「まい」「けり」「べし」の如く、動詞に付き、之に種々の意味を加へて敘述を助けるもの、及び(二)これは花だ」「花の如し」の「だ」「如し」の如く、

助動詞

種々の語に附いて、之に敘述の意味を加へるものを助動詞といふ。

助動詞は活用のある語であつて、いつも他の語に附屬し、之と共に用ひられる。

〔二一〕「新高山は富士山より高い」「心だに誠の道に叶ひなば祈らず」とても神や守らむのは」「より」「だに」「の」「に」「ば」とて、「も」「や」のやうに、他の語に附いて、その語と他の語との關係を示し、又は、之に或意味を添へる語を助詞といふ。
 助詞は、活用のない語であつて、いつも他の語に附屬し、之と共に用ひられる。

品詞と活用の有無
 品詞と附屬する語・獨立する語

〔二二〕以上の品詞の中、動詞・形容詞(用言)及び助動詞には活用がある。即ち、これ等は活用語である。その他の品詞には活用が無い。

〔二三〕品詞の中、助動詞・助詞は、附屬する語である。その他の品詞は

獨立する語である。

練習題

二

次の文の傍線を附けた語の品詞をいへ。

一 昔から松島宮島天橋立を日本三景と稱する。併しこの三つが果して日本最美の風景であらうか。(口語)

二 私は日本三景以上の景色は決して少くないと思ふ。(口語)

三 勿論風景の美をはかる尺度はなく、見る人の考できめられるものである。(口語)

四 「まあ、さうでございましたか。すると疑がはれた事になりますね。はい、疑はしい事は少しもございません。」(口語)

五 和泉の堺に薬種を商なふ者あり。その名を長次といふ。

六 長次嘗て十津川に湯治しけるが、一日山深く分け入りて道に踏み迷へり。

七 一つの谷に下りてふと見れば、美しき籠の流れ来るなりけり。

八 あはれ、この水上には人里ありけりと喜び勇み、水に従つてのぼる。

九 日は已に暮れかゝり、鳥の音がすかに啼を争ふ。

一〇 かくて十町ばかり行くに、岩を切り抜きたる門ありて、内には茅葺の家五六十軒を並べて立ちたり。

練習題

三

A 次の文の一つ一つの単語の品詞をいへ。

一 山の岨を一つ曲ると、突然私たちの足もとから幾疋かの獣が跳り出した。(口語)

二 「鐵砲さへあれば逃しはしないのだが。」(口語)

三 案内者は足を止めて、舌打ちをしながら路ばたの橡の大木を見上げた。(口語)

四 橡の枝には、二匹の子猿をつれた親猿が静かに私たちを見下ろしてゐた。(口語)

五 參謀部の電話のベルが、けたましく鳴る。「オーイ、何か」と、受話器

を耳にあてながら、中佐はかういつた。(口語)

六 「何、乃木少尉が戦死した。何處で。傳令中に。さあ、それを將軍に申し上げないわけには行くまいが。」(口語)

七 電話は切れたが、中佐は受話器を握つて、呆然と立つてゐた。(口語)

B 次の文の傍線を附けた語の品詞をいへ。

一 家々の有様を見るに、石垣には苔生ひて、竹の折戸物寂しく、蔦かづらつら冠木かぶきをかざる。

二 一人の老人、長次に向ひて、此處は山深く巖峙ちて、人の來べき處に
あらず、また宿るべき家もなし。こなたへおはせよ、宿貸し參らせん。といふ。

三 長次強ちにその住みそめし故を問へば、あるじ眉をひそめて、われ等は浮世を遁れて隠れ住む者なり。若し強ひて之を語らば、徒に愁を催す媒ならん。といふ。

第二篇 文語の品詞

第四章 文語の名詞・代名詞

〔二四〕 名詞及び代名詞(即ち體言)は、口語と文語とで、用ひる單語に違ひがあるが、その文法上の性質は大體同様である。

〔二五〕 名詞の中、時や數を表はす語は、副詞のやうに、動詞・形容詞を修飾する事がある。

昨日地震があつた。(口語) 午前十一時東京に到着せり。

木を一本植ゑた。(口語) 大學に三年間在學せり。

〔二六〕 代名詞の中、人を指していふ語を人代名詞といひ、人以外の事物・場所・方角を指していふ語を指示代名詞といふ。

〔二七〕 文語で普通用ひる代名詞は、次の通りである。

時や數を表はす名詞

人代名詞

指示代名詞

文語の代名詞

一、人代名詞

自稱	對稱	近稱	中稱	他稱	遠稱	不定稱
われ	汝	これ	それ	かあか	かれ	た
わ		こ	そ			た
						れ

二、指示代名詞

場所	場	事
角	處	物
こ	こ	こ
な	こ	これ
ち		
	そ	そ
	こ	それ
か	か	か
あ	あ	あ
な	な	あ
ち	ち	か
た	た	かれ
い	い	い
づ	づ	ない
か	く	づ
ち	こ	これ



四

次の文から名詞、代名詞をぬき出し、代名詞はその種類をいへ。

- 一 彼は山又山を越えて遠くかなたに去れり。
- 二 將軍の名は國內に傳はり、その肖像畫はいづこの店頭にも飾られ

名詞
名詞
名詞
名詞
名詞
名詞
名詞
名詞
名詞
名詞

- 三 村長に對する村民の敬愛はすこぶる厚し。されば勤續することすでに二十餘年なり。
- 四 語る言葉もち解けて、われはたゞへつかの防備、かれはたたへつわが武勇。
- 五 かしこに見ゆるは停車場及びその官舎なり。
- 六 そはいと名殘惜しき事なり。さらば、謝恩の印に何か畫がきて參らすべし。
- 七 我若し死したりと聞かば、汝必ずこれを持ち去りて、日本の役所に差出すべし。
- 八 こは思ひも寄らぬ仰かな。わが望こそかなひたれども、君の御恩は未だ報い奉らず。たゞいづかたへも御供を仕るべし。
- 九 去る七月十六日桑港を出帆せる秩父丸は、途中颱風に會ひて豫定よりも二日遅く、昨日午後三時横濱に到着せり。

第五章 文語動詞の活用(二)

〔二六〕 動詞形容詞及び形容動詞(即ち用言)は、口語と文語とで、文法上の差異がかなりある。

〔二七〕 文語の動詞には、口語と同じく六つの活用形がある。しかし、その名稱と用法とは、口語動詞といくらか違ふ所がある。

未然形 **ず**に連る形である。又「むん」「ば」などにも連る。

打たず 讀まむ(ん) 降らば

連用形 「たり」に連る形である。また他の用言にも連り、**て**

「き」「けり」などにも連る。

打ちたり 讀み始む 降りて

終止形 言ひ切る場合に用ひる形である。終止形は用言の本體である。

文語動詞の活用形

打つ。 讀む。 降る。

連體形 體言に連る形である。

打つ人 讀む時 降る雪

已然形 **ども**に連る形である。又「ば」にも連つて、動作が既にさうなつてゐる意味に用ひる。

打てども響かず。 今日**は**雪降ればいと寒し。

注意一 文語の已然形は口語の假定形にあたる。しかし、口語では「打てば」「降れば」等を假定の意味に用ひることが多いので、「打て」「降れ」等を假定形と名づけたのである。

注意二 文語で假定の意味は、未然形に「ば」の附いたもので表はす。打たば響かん。 雪降らば寒からん。

命令形 命令の意を表はす爲に用ひる形である。

打て。 讀め。 降れ。

五

次の文語動詞の六つの活用形を考へて見よ。

知る 汲む 言ふ 勝つ 押す 急ぐ 裂く
有り 飛ぶ 歸る

文語動詞の種類

〔三〕 動詞の活用の種類は、口語では五種であるが、文語では九種である。

第六章 文語動詞の活用(二)

四段活用 上一段活用 下一段活用

上二段活用 下二段活用

カ行變格活用 サ行變格活用

ナ行變格活用 ラ行變格活用

〔三〕 四段活用 口語の四段活用動詞の大部分は、文語に於ても口語と同様に活用する。この種類の活用を、文語でも四段活用と

四段活用

いふ。「書く」といふ動詞について見れば、次の通りである。

(文語)

(口語)

字は書かず。 (未然形) 書かない。

字を書きたり。 (連用形) 書きます。

字を書く。 (終止形) 書く。

字を書く時。 (連體形) 書く時。

字は書けども。 (已然形) 書けば。(假定形)

畫は書かず。

字を書け。 (命令形) 書け。

口語	文語	語	語幹	語尾
書く	書く	書か	か	か
か	か	か	か	か
き	き	き	き	き
く	く	く	く	く
く	く	く	く	く
け	け	け	け	け
け	け	け	け	け

○文語四段活用の動詞は、カ・ガ・サ・ク・ハ・バ・マ・ラの八行にある。(口語よりナ行だけ少
す)

ナ行變格活用

〔三〕 ナ行變格活用 口語四段活用の動詞の中、死ぬは文語では次
のやうに活用する。

(文語)

死な^ず。

(未然形)

死な^{ない}。

知れる人死に^{たり}。

(連用形)

死に^{ます}。

人は一度は死^ぬ。

(終止形)

死^ぬ。

死^ぬる時。

(連體形)

死^ぬ時。

身は死^ぬれども

(已然形)

死^ぬば。(假定形)

名は朽^ちぢず。

國の爲に死^ね。

(命令形)

死^ね。

口語	文語	語	語幹	語尾	未然	連用	終止	連體	(文)已然	命令
死ぬ	死ぬ	死ぬ	死	ぬ	な	に	ぬ	ぬる	(口)假定	ね
			死し		な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
					な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね

右のやうに、文語の「死ぬ」は、な・に・ぬ・ぬる・ぬれ・ねと變化する。この
やうな活用をナ行變格活用(略稱ナ變)といふ。

ナ變に屬する動詞は、「死ぬ」「往ぬ」の二語である。

○「死ぬ」は現代文では、ナ行四段活用にも用ひる。「往ぬ」は今あまり用ひない。

〔三〕 ナ行變格活用 口語の四段活用動詞の中、「有る」は、文語では次

のやうに活用する。

(文語)

國に功有^らむ。

(未然形)

有^らう。

功有^りき。

(連用形)

有^ります。

(口語)

ラ行變格活用

功有り。 (終止形)
 功有る人。 (連體形)
 功有れども (已然形)
 誇らず。 (命令形)
 國に功有れ。 (命令形)
 有る。 (終止形)
 有る人。 (連體形)
 有れば。 (假定形)
 有れ。 (命令形)

口語	文語	語	語幹	語尾	未然	連用	終止	連體	(文)已然	命令
有る	有り	有	有	有	ら	り	る	る	(口)假定	れ
					ら	り	る	る		れ

右のやうに、文語では終止形が「あり」となる。このやうな活用を「ラ行變格活用(略稱ラ變)」といふ。

○終止形がイ段の音で終るのは、動詞ではラ變の外に例がない。ラ變に屬する動詞は、「有り」「居り」「侍り」である。

下一段活用

〔言〕

下一段活用

○居りは現代文では、ラ行四段活用にも用ひる。「侍り」は今あまり用ひない。
 文語では、その活用は口語力行下一段の動詞と殆ど同一である。之を文語の「下一段活用」といふ。

(文語)

(口語)

鞠はけず。 (未然形) けらない。
 鞠をけたり。 (連用形) けります。
 鞠をける。 (終止形) ける。
 鞠をける時。 (連體形) ける時。
 鞠はけれども (已然形) ければ (假定形)
 巧ならず。 (命令形) くれ。
 この鞠をけよ。 (命令形) くれ。

口語	文語	語	未然	連用	終止	連體	(文)已然	命令
蹴る	蹴る		けら	けり	ける	ける	けれ	けよ
			け	け	ける	ける	けれ	けよ
					ける	ける	けれ	けよ
					ける	ける	けれ	けよ
					ける	ける	けれ	けよ
					ける	ける	けれ	けよ
					ける	ける	けれ	けよ
					ける	ける	けれ	けよ
					ける	ける	けれ	けよ

○文語下一段の命令形には、口語下一段で用ひる「ける」の形は用ひない。
 文語下一段活用に屬する動詞は「蹴る」だけである。

○蹴るは、用言に連る場合だけは口語でも「けたふす」「けつまづく」など、「け」を用ひるのが普通である。

練習題

六

次の文語動詞の活用のかたを示せ。

- 泣く 喚ぐ 借る 貸す 待つ 縫ふ
- 呼ぶ 往ぬ 散る 散らす 抜く 足る
- 在り 折る 居り 編む 飽く

上一段活用

第七章 文語動詞の活用(三)

【三】 上一段活用 口語上一段活用の動詞の中、例へば「着る」は文語では左の如く活用し、口語と殆ど同一である。かやうな活用を文語の上一段活用といふ。

(文語)	(口語)
衣は未だき _ず 。	きない。
衣をき _{たり} 。	き _{ます} 。
衣をき _る 。	きる。
衣をき _{る時} 。	きる時。
衣をき _{れども} 。	き _{れば} 。
猶寒 _し 。	(假定形)
衣をき _よ 。	(命令形)
	き _よ 。

口語	文語	語	未然	連用	終止	連體	(文)已然	命令
着る	着る		き	き	きる	きる	きれ	きよ
			き	き	きる	きる	きれ	きよ
			き	き	きる	きる	きれ	きよ

即ち、口語の命令形の「きろ」だけは、文語に用ひない。

○文語上一段活用の動詞は、カ・ナ・ハ・マ・ヤ・ワの各行にある。

○文語上一段活用に屬する動詞は、「着る」「似る」「煮る」「干る」「見る」「射る」「鑄る」「居る」「率ゐる」などである。

○文語上一段動詞は殆ど皆語幹と語尾の區別が無い。

〔三〕 上二段活用 口語上一段活用の動詞の中、文語で上一段に活

用するものの外は、大概之と違つた活用になる。例へば「起きる」の文語の活用は、次の通りである。

(文語)

未だ起きず。

(未然形)

起きない。

(口語)

朝早く起きたり。

(連用形)

起きます。

六時に起く。

(終止形)

起きる。

朝起くる時。

(連體形)

起きる時。

毎朝五時に起くれども、

(已然形)

起きれば。(假定形)

猶間に合はぬ事あり。

早く起きよ。

(命令形)

起きよ。(起きろ)

口語	文語	語	未然	連用	終止	連體	(文)已然	命令
起きる	起く		き	き	きる	きる	きれ	きよ
			き	き	きる	きる	きれ	きよ
			き	き	きる	きる	きれ	きよ

右のやうに、文語の活用の語尾はきく即ち五十音圖のイ・ウ二段の音と、それによるれよの附いたものである。かやうな活用を上二段活用といふ。

下二段活用

○上二段活用の動詞は、カ・ガ・タ・ダ・ハ・バ・マ・ヤ・ラの各行にある。
○ヤ行上二段活用の動詞は「老ゆ」「悔ゆ」「報ゆ」の三語である。

〔七〕 下二段活用 口語下一段活用の動詞は、文語では大概違つた活用になる。たとへば「受ける」の文語の活用は、次の通りである。

(文語)

(口語)

未だ試験を受けず。	(未然形)	受けない。
試験を受けたり。	(連用形)	受けます。
試験を受く。	(終止形)	受ける。
試験を受くる時。	(連體形)	受ける時。
試験を受くれども。	(已然形)	受ければ。(假定形)
合格せず。		
早く試験を受けよ。	(命令形)	受けよ(受けろ)

口語	文語	語	語幹	語尾	未然	連用	終止	連體	(文)已然	命令
受ける	受く	受	受		け	け	く	くる	口(假定)	けよ
					ける	ける	ける	ける	くれ	けるよ

右のやうに、文語の活用の語尾は、けく、即ち五十音圖の「エウ」二段の音と、それによる「れよ」の附いたものである。かやうな活用を下二段活用といふ。

○下二段活用の動詞は、五十音圖の各行と、ガ・ザ・ダ・バの各行とにある。
 ○ア行下二段活用の動詞は「得」「心得」だけであり、ワ行下二段活用の動詞は「植う」「飢う」「据う」の三語だけである。
 ○文語に、下一段活用の動詞(蹴る)があるがそれは口語では普通ラ行四段に活用する。

練習題 七

A 次の文語動詞の活用のしかたを示せ。

B 次の漢字を口語と文語との動詞に用ひて、その活用のしかたを比べて見よ。

悔く	老 ^ホ	据 ^ズ	殖 ^ハ	換 ^カ	下 ^ヒ	怖 ^ホ	生 ^ハ	絶 ^タ	並 ^ナ	合 ^カ	觸 ^ホ	攀 ^ト
堪 ^タ												

過^ス 恥^ズ 強^シ 尋^ム 植^ウ 逃^グ 任^ス
 報^ヘ 懲^ル 恨^ム 混^ズ 周^チ 教^フ 求^ム
 越^エ 枯^ル 飢^ウ 落^ツ 撫^ズ 吠^ウ 考^フ

第八章 文語動詞の活用(四)

カ行變格活用

〔三〕カ行變格活用 口語カ變の動詞「來る」は、文語では次のやうに活用する。

(文語) 人もこす。
 (未然形) こない。
 (口語)

人きたり。(連用形) きます。
 人く。(終止形) くる。
 くる人なし。(連體形) くる時。
 春くれども(已然形) くれれば。(假定形)
 花咲かず。
 とくこよ。(命令形) こい。

口語	文語	語	未然	連用	終止	連體	(文)已然 (口)假定	命令
來る	來く		こ	き	くる	くる	くれ	こい
			こ	き	くる	くる	くれ	こよ

このやうな活用を、文語でもカ行變格活用(略稱カ變)といふ。その終止形と命令形とに於て口語と違ひがある。

○カ變に活用する文語動詞は、來だけである。

〔三九〕 サ行變格活用 口語サ變の動詞「爲る」は、文語では次の如く活用する。

(文語)

仕事もせず。
 熱心に仕事をしたり。
 仕事をす。
 仕事をする時
 熱心に仕事をすれども
 功擧らず。
 仕事をせよ。

(未然形) 仕事もせず。
 (連用形) 熱心に仕事をしたり。
 (終止形) 仕事をす。
 (連體形) 仕事をする時
 (已然形) 熱心に仕事をすれども
 (命令形) 仕事をせよ。

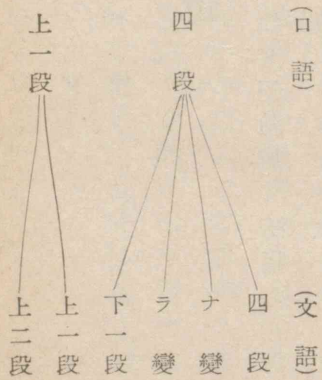
(口語)

口語	文語	語	未然	連用	終止	連體	文(已然)	命令
爲る	爲す	爲す	せ	し	す	する	すれ	せよ
し	し	し	せ	し	す	する	すれ	せよ
し	し	し	せ	し	す	する	すれ	せよ
し	し	し	せ	し	す	する	すれ	せよ
し	し	し	せ	し	す	する	すれ	せよ

このやうな活用を、文語でもサ行變格活用略稱サ變といふ。その終止形が口語と違ひ、又口語の未然形命令形の中、「し」「しろ」は文語には用ひない。

○サ變に活用する文語動詞は「爲」だけである。しかし名詞や漢語等を動詞にするには、サ變にするのが普通であり、その際「サ行」になるものもある。
 罪す 勉強す 製す 論す ストップす 煎す。

〔四〇〕 以上に述べた、口語動詞と文語動詞との活用の種類を對照して示せば、次の通りである。



口語動詞と文語動詞との異同

サ	カ	下二段
變	變	變
サ	カ	下二段
變	變	變

練習題 八

- A 次の文語動詞の活用のしかたを示せ。
- 興くみす 輕かろんず 命いのちず 理ことわり解とす 來く 安やすんず 案あんず 譯やくす
- B 傍線をつけた動詞の活用の種類を考へよ。
- 一 社前より下を望めば、美しく彩色したる土佐繪に向ふ趣あり。
- 二 壁の如く立ちたる岩の面を垂れたる鎖傳ひつゝ攀かち登のぼる。
- 三 茶屋に歸りて預け置きたる傘外套など受け取り、これより主峰を指して右の方に入る。
- 四 刈り果てたる田つらには下りる鳥さへ見えて、豊かなる秋の煙満ちわたる。
- 五 左に折れて池畔を過ぎ、又右に曲りて廣場に出づれば、中央に立て

るは將軍の銅像なり。

- 六 常世はちぎれたる具足を着け、さびたる長刀を横たへ、わるびれたる様もなく進みて御前にかしこまる。
- 七 降り積れる雪も跡なく消えて、山河草木喜びにあふるる春は來ぬ。

C 次の文に誤があつたら正せ。

- 一 水を買かうなどいふは思おもひもよらぬ事なり。
- 二 若わかき時學ときがまばずば老おいひて悔くうる時あるべし。
- 三 國家の榮さかへん事を願ねがひて、絶たへず産業を獎勵せり。
- 四 自ら深くその誤を恥じて、再び人に教おしゆるを欲ほせず。
- 五 輝元大軍を率らい來りて、宗治を救はんたすとせしが、秀吉に敵すべからざるを察して、和を請こえり。
- 六 鹿追かう獵師は山を見ず、飢へたる者は食を擇えらばず。
- 七 敵攻寄すとも、城門を閉じて、決して出することなかれ。

第九章 文語形容詞と形容動詞の活用

文語形容詞の活用形

〔四〕 口語の形容詞の活用形は四つであるが、文語の形容詞には五つの活用形がある。

未然形 「ば」に連つて、假定の意味を表はす形である。

價高くば買ふまじ。 新しくば買はん。

注意 口語形容詞には、未然形なく、假定の意味を表はすには假定形を用ひる。

連用形 動詞に連る時の形である。又口語「ても」の意味の「とも」に連る。

價高くなる。 新しくとも買ふまじ。

終止形 言ひ切るのに用ひる形である。

終止形は形容詞の本體である。

價高し。 品新し。

連體形 體言に連る形である。

高き價。 新しき品。

已然形 「ども」に連る形で、又「ば」にも連る。さうして「已」にさうである意を表はす。

價高けれどども買ふべし。 新しければ買ひたり。

注意 文語の已然形は、口語の假定形と同じ形である。

〔四〕 形容詞の活用は、口語では一種であるが、文語では二種になる。

ク活用 口語の「高い」は、文語では次の様に活用する。

	文語	口語	語幹	語尾	未然	連用	終止	連體	(文)已然	(口)假定	命令	
	高し	高い	高	高	く	く	い	い	き	け	け	
	高し	高い	高	高	く	く	い	い	き	け	け	

このやうに、語尾がく・し・き・けれと變るものを文語のク活用と

文語形容詞の活用ク活用

シク活用

いふ。

〔四〕 シク活用 口語の「新しい」は、文語では次のやうに活用する。

口語	文語	語	未然	連用	終止	連體	(文)已然	(口)假定	命令
		新し							
新しく	新し	新	しく	しく	い	い	けれ	けれ	

このやうに、語尾がしくしくしきしけれと變るものを、文語のシク活用といふ。

○口語形容詞の語幹が「し」で終るものが文語ではシク活用となる。

○シク活用の形容詞は文語と口語とで語幹が違つてゐる。即ち、文語では、口語の語幹の終の「し」を除いたものが語幹となり、「し」は語尾となる。

〔四四〕 口語の形容動詞は二種であるが、文語の形容動詞には三種の種類がある。活用は、何れもラ行變格活用に準ずる。

文語の形容動詞の種類

種三第	種二第		種一第		語幹	語尾	未然	連用	終止	連體	(文)已然	(口)假定	命令
	語文	語口	語文	語口									
泰然	洋々	丁寧か	丁寧か	嬉暑し	嬉暑 <small>あつ</small> し		から <small>(ズ)</small>	かり <small>(キ)</small>	かり <small>(キ)</small>	か <small>(シ)</small>	か <small>(シ)</small>	か <small>(シ)</small>	かれ
たら <small>(ム)</small>	だ <small>(ウ)</small>	なら <small>(ズ)</small>	なら <small>(ズ)</small>	から <small>(ウ)</small>	から <small>(ズ)</small>	未	から <small>(ズ)</small>	かり <small>(キ)</small>	かり <small>(キ)</small>	か <small>(シ)</small>	か <small>(シ)</small>	か <small>(シ)</small>	かれ
たり <small>(ケム)</small>	だ <small>(タ)</small>	なり <small>(ケム)</small>	なり <small>(ケム)</small>	かつ <small>(タ)</small>	かつ <small>(タ)</small>	連	かり <small>(キ)</small>	かり <small>(キ)</small>	かり <small>(キ)</small>	か <small>(シ)</small>	か <small>(シ)</small>	か <small>(シ)</small>	かれ
たり	だ	なり	なり			終	かり <small>(キ)</small>	かり <small>(キ)</small>	かり <small>(キ)</small>	か <small>(シ)</small>	か <small>(シ)</small>	か <small>(シ)</small>	かれ
たる <small>(ベシ)</small>	な	なる <small>(ラムシ)</small>	なる <small>(ラムシ)</small>			連	か <small>(シ)</small>	か <small>(シ)</small>	か <small>(シ)</small>	か <small>(シ)</small>	か <small>(シ)</small>	か <small>(シ)</small>	かれ
たれ <small>(バ)</small>	なら	なれ <small>(バ)</small>	なれ <small>(バ)</small>			(文)已然	か <small>(シ)</small>	か <small>(シ)</small>	か <small>(シ)</small>	か <small>(シ)</small>	か <small>(シ)</small>	か <small>(シ)</small>	かれ
たれ		なれ	なれ			命令	か <small>(シ)</small>	か <small>(シ)</small>	か <small>(シ)</small>	か <small>(シ)</small>	か <small>(シ)</small>	か <small>(シ)</small>	かれ

文語の第一種第二種は、口語の第一種第二種にあたる。第三種は口語にはない。

○第一種の終止形及び已然形は現代文では殆ど用ひられない。

○第一種は形容詞から第二種は「に」で終る副詞「静かに」「丁寧に」などから、第三種は

「と」で終る副詞(「洋々と」「泰然と」など)から出たものである

練習題

九

次の文から形容詞・形容動詞を抜き出し、その活用をいへ。

- 一 大國主命は恭しく國土を天照大神に奉りぬ。大神その真心の厚きを賞して、命の爲に壯大なる宮殿を造らしめ給ふ。
- 二 縦は柔かにして工作に便なれば、箱類を作るに用ひられ、梅は堅くして久しきに耐ふるが故に、家屋の土臺となすに宜し。
- 三 波靜かなる島のあたり、高く低く群飛ぶかもめは、落花の風にひるがへるに似たり。
- 四 近頃は容態殊に悪しく候へば、命の限りも遠からじと、一同あきらめ居り候。
- 五 堂々たる風采と朗々たる音聲とは、まづ聽衆の心を動かしたり。
- 六 いかなる所にも樂しき地はあるべく、またいかなる所にも樂しからざる地はあるべし。

- 七 諺に「始よければ終よし」ともいひ、また「始あしければ後よし」ともいふ。
- 八 われ等は、この狭小なる國土に安逸を希ふ事なく、進んで地廣く、人口稀なる處に伸展せざるべからず。

第十章 文語用言の音便形

〔四〕 文語の用言にも口語と同様に音便形がある。その中、動詞の音便形は、主として、四段・ナ變・ラ變の動詞が助詞「て」に連る時に現はれる。その形及び種類は口語のと同じである。

○音便形は他の語尾から轉じて出來たものである。口語には音便形を用ひる場合には、いつも之を用ひるが文語には、もとの形と音便形とをどちらも用ひる。

- 一 語尾がイとなるもの(イ音便形) カ行四段のキ、ガ行四段のギから。(但しガ行の時「ては」「で」となる。)

文語動詞の音便形

- 一 聞いて(聞きて) 塞いで(塞ぎて)
- 二 語尾がウとなるもの(ウ音便形) ハ行四段のヒから。
言うて(言ひて) 請うて(請ひて)
- 三 語尾がンとなるもの(撥音便形) バ行四段のビ、マ行四段のミ、ナ變のニから。(ては、でとなる。)
運んで(運びて) 踏んで(踏みて) 死んで(死にて)
- 四 語尾が促音となるもの(促音便形) タ行四段のチ、ハ行四段のヒ、ラ行四段のリ、ラ變のリから。
勝つて(勝ちて) 養つて(養ひて) 刈つて(刈りて)
有つて(有りて)

●以上の外、サ行四段の語尾シがイになる事がある。

燒栗致いて候。二十四差いたる切ばの箭。

文語形容詞の音便形

〔四六〕

文語形容詞の音便形は、主として連用形が他の用言に連る時

又は連體形が助詞かなに連る時に現はれる。ウ音便形とイ音便形とがある。

日も高う(高く)なりぬ。 雨烈しう(烈しく)ふる。
よい(よき)かな。 悲しい(悲しき)かな。



一〇

A 次の文から音便形を抜き出し、その原の形をいへ。

- 一 夜ふけに及んで松明たいまつの光おびたゞしう見ゆ。
- 二 清正は片鎌槍をしごいて突いてかゝる。
- 三 道に迷うて小川に出で、流れに沿うて下れば、一寒村に出づ。
- 四 こはいかに、降つて湧いたる敵の大軍。
- 五 人に長たるも、またかたいかな。

B 次の文に誤があつたら正せ。

- 一 仰うやひで天の高たかきを見る。

- 二 勇むで家を出でたり。
- 三 重荷を負ふて坂を登る。
- 四 鹿毛なる馬に黒鞍置るて乗つたりけり。
- 五 言うてかひ無き事をなげくは愚なり。
- 六 飛むで火に入る夏の蟲。
- 七 人を疑う前に、まづ自己を省みよ。

第十一章 文語の副詞・接續詞・感動詞

〔四七〕 副詞・接續詞及び感動詞は、口語と文語とで、用ひる單語には違ひがあるが、その文法上の性質は大體同様である。

〔四八〕 副詞の中、程度を表はすものは、用言を修飾するばかりでなく、〔甲〕他の副詞、又は〔乙〕或種の體言を修飾する事がある。

〔甲〕 非常に見事に着陸した。(口語)
いとかすかに見ゆ。

〔乙〕 わづか五分の違ひだつた。(口語)

やゝ右を見よ。

この大發明は唯二人の協力によつて成し遂げられたり。
〔四九〕 副詞には、之を受ける用言に、一定の言ひ方を要求するものがある。

それは恐らく事實でせう。(口語)

決して忘れません。(口語)

たとひ誰が何と言つても、あの人は聞くまい。(口語)

汝須らく史書を讀むべし。

われ豈辯を好まんや。

よも知らじ。

をさく劣るまじ。

砲聲は恰も百雷の一時に落つるが如し。

程度を表はす副詞

一定の言ひ方を要求する副詞

文語の接續詞

〔五〇〕

接續詞として文語に用ひられる語は、大體次の通りである。

並に 及び 又 且

さらば されば かくて 因つて 随つて

或は 又は 若しくは

但し 尤も されど さはれ 然れども 然るに

〔五一〕

感動詞として文語に用ひられる語は、大體次の通りである。

ああ あはれ あな あはや

いざ いで や やよ すは いか

いな おう

練習題

二

次の文から副詞・接續詞・感動詞を抜き出せ。副詞は何を修飾するかを示せ。

一 城の前面は直ちに村落に臨みて、山高からず、坂もさまで峻しから

ず、谷亦深しといふべからず。

二 山上の廣さは僅かに數百歩に過ぎずして、眞にこれ彈丸黒子の孤城のみ。

三 ずは伏兵のありけるぞ。汝等速かに之を撃ち拂ふべし。

四 彼の私財は既に盡きたり。しかもこの救濟事業は中止すべきにあらず。よつて普く世人に訴へて、寄附を募らんとせり。

五 事實は全く汝の言の如し。然れども如何に之を處理すべきかは、未だ何人も考へ得ず。

六 やゝ辨慶、よも忘れはすまじ。去年の今日を。

七 なほも勇敢に進まんか、はた斷念して退くべきか、予は暫し惑はざるを得ざりき。

八 最も明瞭に答へたるは、彼なりき。

九 若し幸に神の助あらば、生きて還るべし。

一〇 敵は不意の攻撃に恐れて、はるか後方に退却せり。

文語助動詞の種類

第十二章 文語助動詞の種類と活用(一)

〔五〕 文語の助動詞は、口語助動詞よりも一種多く、すべて十種に分れる。

受身² 可能³ 使役⁴ 打消⁵ 過去及び完了⁶ 推量⁷
 希望⁸ 敬讓⁹ 指定¹⁰ 比況¹¹ (可也) (白亮)

○口語には比況の助動詞はな。

文語助動詞の活用

〔五〕 文語の助動詞にも活用がある。その活用のしかたは、文語の動詞と同じものと、形容詞と同じものと共に、或活用形の缺けたものがある、特殊なものがある。他に、語形の變化せぬものもある。

受身の助動詞

〔五〕 受身の助動詞 る らる

人に笑はる。 主人に譽めらる。

語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
る	れ	れ	る	る	る	れよ
らる	られ	られ	らる	らる	らる	られよ

下二
活用
下二
活用

○受身の「る」「らる」に當る口語は「れる」「られる」である。

「る」は、四段・ナ變・ラ變の動詞の未然形に付き、「らる」は、その外の活用の未然形に附く。

●サ變の動詞に附いて「罪せらる」「侮辱せらる」となるのを現代の文語では「罪さる」「侮辱さる」ともいふ。

可能の助動詞

〔五〕 可能の助動詞 る らる

一日に十里は歩まる。 何時にても見らる。

○可能の「る」「らる」に當る口語は「れる」「られる」である。

「る」「らる」の活用のしかたは、受身の「る」「らる」と同じである。但しこれには、命令形がない。

使役の助動詞

〔美〕

「る」「らる」の動詞への付き方は、受身の「る」「らる」と同じである。
○讀む能はず讀み得たりなどは動詞が附いて可能の意を表はしたのである。

使役の助動詞 ず さす しむ
弟に苗木を買はず。 苗木を庭に植ゑさす。
苗木を鉢に移さしむ。

語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
す	せ	せ	す	する	すれ	せよ
さす	させ	させ	さす	さする	さすれ	させよ
しむ	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめよ
						下二段活用

○使役の「す」「さす」に當る口語は「せる」「させる」である。「しむ」も之と同様の場合に用ひる。

「す」は、四段・ナ變・ラ變の動詞の未然形に付き、「さす」はその外の活用の未然形に附く。「しむ」は、すべての動詞の未然形に附く。

打消の助動詞

〔毛〕

●「さす」がサ變の動詞に附いて「携帯せさす」「選舉せさす」といふべきを現代の文語では「携帯さす」「選舉さす」ともいふ。
打消の助動詞 ず ざり
花は未だ咲かず。
群衆は既に散じて一人も見えざりき。

語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
ず	ず	ず	ず	ぬ	ね	
ざり	ざら	ざり	(ざり)	ざる	ざれ	ざれ
						ラ變

特殊活用

○「ず」に當る口語は「ぬ」「ん」である。口語では又「ない」も用ひる。「ざり」は口語ない又は「ぬ」の場合の外に、また「なから」「ウ」なかつた」の場合に用ひる。
「ず」「ざり」は動詞及び形容動詞の未然形に附く。

練習題

二二

傍線を附けた助動詞の種類と、その活用のしかたとを述べよ。

- 一 彼の眺め入りしは繪にあらす、團扇に用ひられたる竹なりしなり。
- 二 今日文明の利器と稱せらるるものにして、エヂソンの天才によらざるもの殆どなしといふ。
- 三 たゆまずば千里の道も行かるべし。
- 四 毛生ひたる厭はしき蟲にも松蟲といふがありて、松を枯死せしめ人に疎まる。
- 五 かねての本望を遂げさせんとて、終に出家せしめたり。
- 六 後は群山にさへぎられて見えざれども、前は際涯なき平野なり。
- 七 避けらるべき禍を避けんとする意なきものは、得らるべき機会をも失ふ者なり。

第十三章 文語助動詞の種類と活用(二)

過去及び完了の助動詞

〔天〕 過去及び完了の助動詞 き けり〔以上、過去〕 ぬ つ たり
り〔以上、完了〕

昔支那に吳越といふ二國ありき。
昔一人の男ありけり。
庭の梅もはや散りぬ。
とかくして今日も暮しつ。
門前に國旗を掲げたり。
四月より級長となれり。

語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
き			き	し	しか	
けり	(けら)		けり	ける	けれ	
ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	(ぬ)
つ	て	て	つ	つる	つれ	(てよ)
たり	たら	たり	たり	たる	たれ	(たれ)
り	(ら)	(り)	り	る	(れ)	(れ)

特殊活用
ラ變
ナ變
下二段活用
ラ變
ラ變

○口語には、過去にも完了にも「た」を用ひるが、文語では過去の助動詞と完了の助動詞とは大體分れてゐる。

○口語の「た」に相當する文語助動詞は「たり」であるが、口語の「た」は、また文語の「き」「けり」「ぬ」「つ」「り」にあたる場合にも用ひる。

○「ぬ」「つ」は、また口語「てしまふ」或は「てしまつた」の意味にも用ひ、「たり」「り」は、口語「てゐる」「である」の意味にも用ひる。

散りにし花(散つてしまつた花)

いづこに行きつらん(行つてしまつたらう)

壁に掛けたる繪(掛けてある繪)

時計は絶えず時を刻めり(刻んでゐる)

「き」「けり」「ぬ」「つ」「たり」は、動詞の連用形に附く。「き」「けり」は形容動詞の連用形にも附く。但し、「き」「ぬ」には、次の例外がある。

^終 ^{連用} ^終 ^{連用}
木 ^終 ^{連用}
己 ^終 ^{連用}
しか

一、「き」の終止形は、カ變の動詞には全く附かず、連體形已然形は、その未然形にも附く。又「き」の連體形已然形は、サ變

の動詞の連用形には附かず、その未然形に附く。

カ變
わな ^{未然} ^{連用}
こ ^{未然} ^{連用}
しか ^{連用} ^{連用}
しか

サ變
せ ^{未然} ^{連用}
しか ^{連用} ^{連用}
し ^{連用} ^{連用}
き

二、「ぬ」は、通例ナ變の動詞には附かない。

○「ぬ」「つ」の未然形「な」「て」は普通助動詞「む」助詞「ば」に連り、連用形「に」「て」は助動詞「き」「けり」に連る。

散りなむ。	散りなば。	散りにき。	散りにけり。
取りてむ。	取りてば。	取りてき。	取りてけり。

「り」は四段活用の動詞の已然形と、サ變の動詞の未然形にだけ附く。

われ等は全力を盡せり。

推量の助動詞

われ等は最後まで努力せり。

〔五〕 推量の助動詞 らし むん むずんず らむらん

けむけん べし まじ じ まし めり

彼處にも雪は降るらし。

麓には旅店もあらむ。

敵攻め寄せむず。

雲のいづくに月宿るらむ。

昔の友はいづち行きけむ。

演習に参加する軍艦は百艘を超ゆべし。

彼の勇武は如何なる者にも劣るまじ。

喜の來らむ日も遠からじ。

早く知らましかば、かゝる不覺はなからまし。

はや夜も明くめり。

	終止	未然	終止	連用	終止	未然	未然	終止	終止	終止
語	めり	まし	じ	まじ	べし	けむ	らむ	むす	む	らし
未然		(ませ)		まじく	べく					
連用	(めり)			まじく	べく					
終止	めり	まし	じ	まじ	べし	けむけん	らむらん	むすんす	むん	らし
連體	める	まし	(じ)	まじき	べき	けむけん	らむらん	むする	むん	(らし)
已然	めれ	ましか	(じ)	まじけれ	べけれ	けめ	らめ	むすれ	め	(らし)
命令										
	ラ變	特殊活用	變化せず	シク活用	ク活用	四段活用	四段活用	サ變	四段活用	變化せず

「らし」に當る口語は「らし」と「む」に當る口語は「う」「よう」「まじ」に當る口語は「まし」である。「らむ」は口語だらう又は「であらう」の意味に「けむ」は口語「ただらう」又は「た

であらうの意味に「じ」は「まい」又は「ないだらう」の意味に用ひる。
 ○「むず」「べし」「まし」「めり」にあたる助動詞は口語にない。その中、「むず」は口語「う」「よ」の意味に「べし」は推量「だらう」「可能」ことが出来る、「義務」なければならぬ「命令」なさい」などの意味に用ひ「まし」は實際さうでない事を假に想定する場合、又は「う」「よう」の意味に用ひ「めり」は「様子だ」と大體推量していふ意味に用ひる。

「らし」「らむ」「べし」「まじ」「めり」は、動詞の終止形に附く。但し、ラ變の動詞及び形容動詞には、連體形に附く。「あるらし」「あるらむ」「あるべし」「あるまじ」など

「む」「じ」「むず」「まし」は、動詞及び形容動詞の未然形に附く。

「けむ」は、動詞及び形容動詞の連用形に附く。

○「む」「むず」「らむ」「けむ」は發音のまゝに「ん」「んず」「らん」「げん」とも書く。

○「べし」「まじ」の連用形「べく」「まじく」が動詞「あり」と合體して出來た「べかり」「まじかり」がある。第一種形容動詞と同様に活用する。

木を折るべからず。

希望の助動詞

〔六〕

希望の助動詞 たし まほし

人には言ふまじかりけり。

早く家に歸りたし。 一人行かまほし。

語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
たし	たく	たく	たし	たき	たけれ	
まほし	まほしく	まほしく	まほし	まほしき	まほしけれ	

ク活用

シク活用

○「たし」に當る口語は「たい」である。口語「たがる」に當る文語助動詞はない。
 「たし」は動詞の連用形に付き「まほし」は未然形に附く。

○「たし」「まほし」の連用形「たく」「まほしく」が動詞「あり」と合體して一語となつた「たかり」「まほしかり」がある。第一種形容動詞と同様に活用する。

逢ひたかりき。
 さほど見まほしからず。

練習題

一三

傍線を附けた助動詞の種類と活用のしかたとを述べよ。

- 一 たのしみは朝起き出でて昨日まで無かりし花の咲ける見る時。
- 二 その人の御名は聞かざりしかども、荷物のさげ札に、市の字ありしを見覚えたり。
- 三 右に見ゆるは山にはあらし、雲ならんと云ふ者もありき。
- 四 何故に國を去らんとまで思ひ立ちけんとかやしく候。
- 五 足らぬ事なき身には成りけれども、なほ貧しき昔を忘れざりき。
- 六 汝かの地に行かば、必ずや人に怪しまれて、或は命も危かるべし。
- 七 この分ならば別條あるまじく存じ候に付、御安心下されたく候。
- 八 義時しばく、上皇の仰にそむきしかば、上皇大いにいきどほり給ひ、國々の武士を召して、義時を討たしめ給ひき。
- 九 少將、さしも頼もしう思ひつる宰相殿には離れ給ひぬ。心の中、さこそは便り無かりけめ。
- 一〇 其處には兵六七千騎もあるらんとぞ見えし。

〔六〕

敬讓の助動詞 る らる す さす しむ

第十四章 文語助動詞の種類と活用(三)

- 一 山里に散りなましかば、櫻花、匂ふさかりも知られざらまし。
- 二 めでたく見えさせ給ふ御有様、千歳を経とも飽く世あるまじかん(まじかる)めり。
- 一三 若しこの事漏れぬることならば、行綱(人名)先に失はれなんす。

主人は毎日五時に歸らる。
 先生は朝六時に起きらる。
 殿下も會に臨ませらる。〔せはすの未然形〕
 殿下は快く之を受けさせ給ふ。〔させはさすの連用形〕
 陛下親しく閱兵せしめ給ふ。〔しめはしむの連用形〕

○敬讓の「る」「らる」に當る口語は「れる」「られる」である。口語「ます」に相當する文語助

動詞は無。

「る」「らる」の活用及び動詞への付き方は、受身の「る」「らる」と同じである。

「す」「さす」「しむ」の活用及び動詞への付き方は、使役の「す」「さす」「しむ」と同じである。但し、現代の文語では「らる」「給ふ」のやうな他の敬意を示す語と共に用ひるのが普通で、その終止形以下はあまり多く用ひない。

〔三〕 尊敬又は謙讓の意味を持つてゐる動詞を、敬讓の助動詞のやうに用ひる事がある。

殿下も臨場し給ふ。深く頼み奉る(參らす)。

涙にしづませおはします。

無事に暮し居り候。

われは遠國の僧にて候。これはわが子に侍り。

指定の助動詞

〔四〕 指定の助動詞 なり たり

東京は我が國の首府なり。

心なき人は、之を見て笑ふなり。

彼の父は大實業家たりき。

形動 (ナリ) 動 (ナリ) 副 (ナリ) 助 (ナリ) 接 (ナリ)

語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
なり	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ
たり	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ
				ラ變	ラ變	ラ變

○「なり」に當る口語は「だ」である。口語「だ」に當る文語助動詞はない。

「なり」「たり」は體言に附く。「なり」は、また用言の連體形にも附く。

〔五〕 比況の助動詞 ごとし

降る雪は花の散る(が)ごとし。

往事を思へば夢のごとし。

比況の助動詞

語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
ごとし	ごとく	ごとく	ごとし	ごとき		

ク活用

○口語には比況の助動詞がない。文語「ごとし」の意味を「やうだ」で表はす。

「ごとし」は、動詞の連體形、又は之に助詞「が」の附いたもの、又は體言に助詞「の」の附いたものに附く。

○「ごとくは」にて「にして」及び「なり」を附けて用ひる事がある。

顔容婦女の如くにて。而も心は鐵石の如くなり。

一四

A 傍線を附けた助動詞の種類とその活用のしかたとを述べよ。

- 一 天顔殊にうるはしく笑ませ給ひぬ。
- 二 學生たるものは、すべて某の如くありたきものなり。
- 三 陶山義高等皇居に火を放ち奉れば、後醍醐天皇は終に笠置を出でさせ給ふ。

詠歌
なり。
終止
音すなり

四 入々もはじめ一二町が程は、主上を扶けまゐらせて、前後に御供申されけり。

五 雨の降るかと思召して、木蔭に立寄せ給へば、木の下露のはらはらと御袖にかゝるなりけり。

B 次の文から助動詞を抜き出し、その活用のしかたを示せ。

- 一 殿も之を御形見に御覽せまほしくて、いたく惜しませ給ひけり。
- 二 佛前には五十餘歳の旅商人ありて、さめくと泣きゐたり。
- 三 うちつけにその故を問ふべきにあらねば、われも立去りて元の驛路に出でぬ。
- 四 籠に松林に包まれて立てる神社あり。里人に問へば八幡宮なりといふ。
- 五 かの建御雷神が大國主命と會見せられしは、此處なるべしといふ。
- 六 そのかみ此處にいかめしく向ひあひけん英雄の姿、今までのあたり見るが如し。

七 明治神宮の御造營には、各地より御手傳を願ひ出づる者多かりしかば、何れも十日間を限りて土木に従事せしめたるに、通常の人夫にもまさりて、仕事ははかどりたりと聞く。これも真心の致す所なるべし。

C 次の文から助動詞を抜き出し、その用法を説明せよ。

- 一 涼風に袂を拂はせつゝ橋上に立てば、河鹿の音もかすかに聞取られたり。
- 二 柳に繋がれたる馬のいなゝく様などげに、田舎ならでは見らるまじき景色なり。
- 三 水を入れたる器に孔をあけんに、たとひ流るゝこと少くとも、絶え間なく漏りゆかば、やがて水は盡きぬべし。
- 四 何事もせざるうちに、はや三年は過ぎにけり。
- 五 曾呂利新左衛門、或時太閤に對ひ、願はくは一日御耳の香を嗅がせられたしといふ。

- 六 太閤、こやつ又何をかなすらん」と疑はれしが、宜し、汝がよきに嗅ぐべし」と許されたり。
- 七 諸大名は、讒言せらるゝにあらざるかを憂へ、數多の金銀を曾呂利が方へ贈りけり。
- 八 十津川へ寄せせんする事は、たとひ十萬騎の勢ありとも叶ふべからず。
- 九 その時の事のみ思ひ出されて、再び參らまほしき心地す。
- 一〇 見る人もなくて散りぬる奥山の紅葉は夜の錦なりけり。
- 一一 人は形ありさまの勝れたらんこそあらまほしかるべけれ。
- 一二 御前に持ちて參れば、宮は、めでたくも書がれたるかな。など譽めさせ給ひて、御文は取らせ給ひつ。

第十五章 文語の助詞(一)

〔空〕

文語の助詞は、口語のとは違つた語を用ひる事があり、又同じ

第一種の助詞

語を用ひても、意味や用ひ方の異なるものがある。

〔六〕 第一種の助詞 主として體言に附くもので、「が」「の」「を」「に」「へ」「と」「より」にてなどを用ひる。

が 口語と同じく、主語を示す外に、又體言に連る修飾語をつくる爲に用ひることがある。

誰が宿 梅が香 君が代

の 體言を修飾する修飾語をつくる外に、主語を表はす爲に用ひる事が少くない。

月の明かなる夜 色の美しきを賞す。

秋の萩野にさを鹿の鳴く。

に 文語では、動詞ありに連つて、之と共に、指定の助動詞のやうな意味になる事がある。

此の土は樂園にあらず。

これと同じ意味で、下に續ける場合には「に」して「を」用ひる。

正成は父にして、正行はその子なり。

今日は日曜にして祭日なり。

へ 文語では、主として方角を示す爲に用ひる。

西へ飛ぶ。 京都へ去る。

と 引用の場合には、體言の外に、文にも附く。

敵艦見ゆと報じ来る。

わが子悪しかれと祈る親はなし。

○この場合に、引用文の終の用言の終止形を、連體形にする事が現代の文語では許容されてゐる。

月出づると見えて……

「と」が對等の資格で並ぶ體言を結び附ける場合には、文語では

叔父と叔母とを訪ふ。

のやうに「と」を各語の下に附けるのが本格である。但し、現代文では誤解を來すおそれのない場合には、最後の「と」を省いてもよい。

○次のやうな場合は「と」を省けば誤解を來すおそれがある。

甲と乙との弟に逢ふ。

甲と乙の弟とに逢ふ。

より 口語と同じく「山より高し」のやうに用ひる外に、口語の「から」の代りにも用ひる。

大阪より歸る。 會は六時よりはじまる。

にて 口語の「で」にあたる。

東京にて逢ふ。 萬年筆にて書く。 病氣にて休む。

父は軍人にて、子は實業家なり。

彼は富豪にて慈善家なり。

○口語の第一種の助詞「から」「で」は、文語には普通用ひなからず。

〔六〕 文語では「を」して「を」を以て「に」について「に」によつて「に」において「に」おける「な」などの連語を、第一種の助詞と同様に用ひる。

斥候をして敵状を搜らしむ。

彼の沈着なる事は、これを以て知るべし。

これより戦況について語らん。

無線電信によつて危急を報ず。

東京において成功す。

平安朝における國文學の發達は、假名の發生に負ふ所多し。

〔六〕 第二種の助詞 主として用言に附いて、接續詞と同じやうなはたらきをするもので、「ば」「とも」「ども」「が」「に」「を」「て」「で」「つつ」などを用ひる。

ば 口語では、用言の假定形に附いて、假定の意味を表はすが、
 文語では(一)未然形に附いて、假定の意味を表はす。
 彼行かば我も行かむ。 價安くば買ふべし。
 (二)已然形に附いて、口語第二種の助詞と又は「からの意味を
 表はす。
 風吹けば波立つ。 心正しければ物に恐れず。
 今日雨降れば外出せず。
 この花美しければ人に折らるるおそれあり。

とも 動詞の終止形、形容詞の連用形に附いて、口語の「ても」の
 意味に用ひられる。
 繪に書くとも筆も及ばじ。 苦しきとも忍ぶべし。

どども 用言の已然形に附いて、口語の「けれども」の意味に用
 ひられる。

某は身賤しけれどども心の正しきものなり。

がにを 共に用言の連體形に附いて、口語第二種の助詞「が」の
 意味に用ひられる。

昨日も搜したるが見えざりき。
 雨烈しきに、出で行けり。

かくとは思はざりしを、さても夥しき軍勢かな。
 「にはまた或事の起つた時をいふにも用ひられる(口語第二
 種の助詞」と又は助動詞「たら」の意味)。

ふと彼方を見るに、敵雲霞の如く押し寄せたり。
 文語では連用形に付き、時として音便形に附く。

赤くて大きな花。
 雨降りて降つて地固まる。

〇「て」は副詞に附く事がある。

四海波靜か。にて天下太平なり。

○「て」はまた助詞とに附いて「とて」となる事がある。

昔天竺に祇園精舎とて名高き寺ありき。

て 動詞の未然形に付き、打消の意味が助詞「て」に加はつたものを表はす。

寝もせで夜を明かす。

つつ 動詞の連用形に付き、口語ながらの意味に用ひられる。

泣きつゝ語る。

讀みつゝ書取る。

○口語の「ても」「けれども」「のに」「から」「ので」「し」は文語には用ひない。

○「處」「間」のやうな名詞は第二種助詞のやうに用ひられる事がある。

私事久しく病氣にて引籠り居り候處、今回全快致し候間、御安心下されたく候

読習

一五

次の文の傍線を附けた助詞は、如何なる種類に屬するかを示せ。

- 一 父母の病あつければ、醫藥の効なきを知るとも、尙治療につとむるは人情の常にあらずや。心力を盡くして、しかも救ふ事能はざるは天命なり。事既にこゝに至る。われたゞ死せんのみ。
- 二 宣長は八歳の頃より、讀み書きを習ひたりしが、後契沖の著せる書物を見て、國學に志し、遂に一代の大學者となれり。
- 三 行幸あまりに遅かりしかば、人をしてうかゞはしむるに、播磨の今宿といふ處より、山陰道にかゝり給ひし由なり。
- 四 されば美作の杉坂に待ち奉らんとて、けはしき山路をふみわけて、たどり着きたりしに、主上はや院庄に入らせ給ふといふ。
- 五 急がずばぬれざらましを、旅人のあとよりはるゝ野路の村雨。

第十六章 文語の助詞(二)

〔六〕 第三種の助詞 第一種第二種以外のもので、「は」「も」「ぞ」「なむ

(なん)「こそ」か「や」だに「すら」さへ「し」のみ「ばかり」など「まで」
 「な」な……「そ」ば「や」が「な」か「な」か「し」よ「や」ななどが用ひられる。
 口語と意味や用ひ方の違つたものを擧げれば、次の通りである。
 ぞなむ(なん)かや 「ぞ」か「や」が用言や助動詞に附いて、文の終
 りに来る時、「ぞ」か「は」連體形に、「や」は終止形に附く。

何人の言ひけるぞ。 あるかなきか。
 ありやなしや

右の助詞及び「なむ(なん)」が文の中にあつて、用言や助動詞
 が之を受けて文を結ぶ時は、必ずその連體形を用ひる。

名残なく散るぞめでたき。

只今なむ参り來つる。

誰かある。 惜しくやあるべき。

こそ この助詞が文の中にあつて、用言や助動詞が之を受け

て文を結ぶ時は、必ずその已然形を用ひる。

時こそ來たれ。

かなたに見ゆる蘆屋こそ我がなつかしの住みななれ。

かやうに、「ぞ」「なむ(なん)」か「や」及び「こそ」を受けて、連體形及

び已然形で文を結ぶのを係結の法則といふ。

だにすら 口語の「さへ」でもなどの意味に用ひる。

いろはだに知らず。 治まれる今の世にすら此の如し。

さへ 口語の「までも」の意味に用ひる。

風さへ吹き出でたり。 残る一人の子にさへ別れたり。

し 意味を強めるのに用ひる。

吾亦考ふる所なきにしもあらず。

花をし見れば物思ひもなし。

のみ 口語の「だけ」「ばかり」などの意味に用ひる。

彼のみ喜ばざるはずなし。
残れるはこれのみなり。

なな：そ 共に禁止の意を表はす。「な」は動詞の終止形に、な

…その「そ」は連用形に附く。な(本形)え

忘るな な行きそ。な(連用)え

但し、「な」はラ變の動詞にはその連體形に附く。又「そ」はカ變

サ變の動詞には、その未然形に附く。

あるな。 なこ(來)そ。 なせ(爲)そ。

ばや 自己の希望を表はす。 動詞の未然形に附く。

問はばや遠き世々の跡。

なむ(なん) 動詞の未然形に附いて、他に對してあつらへ望む

意を表はす。

苔の衣をわれに貸さなむ(なん)。

○この「なむ(なん)」を係として用ひる「なむ(なん)」と區別する爲に、願望の「なむ」といふことがある。

がな 多くの場合に助詞「も」に連つて、希望の意を表はす。

昔を今になすよしもがな。 これ無くもがな。

かな 體言又は用言・助動詞の連體形に附いて、感動の意を表

はす。

けなげなる男の子かな。 あゝ悲しきかな。

かし 言ひ切つた形に附いて、意味を強めるのに用ひる。

幸あれかしと祈る。 然覺ゆるぞかし。

やな 共に感動の意味を表はす。

あな、嬉しや。 進めや進め。

いでや、目に物見せん。

花の色は、うつりにけりな。

Handwritten notes in blue ink at the top of the right page, including '連用', '未然', '終止', and 'ナニ' with arrows pointing to the main text.

心ある人に見せばやな、この雪景色。

神代卷 一六

次の文から助詞を抜き出し、その種類を示せ。

- 一 われは賤しき身なれども、忠義の心ばかりはいかでか人に劣るべき。
- 二 これのみは人の國より傳はらで神代を受けし敷島の道。
- 三 近き火などに逃ぐる人は、暫しとやいふ。恥をも顧みず、財をも捨てて去るぞかし。
- 四 父の世を去るまでは、都になむ住みける。
- 五 少將もさすが心にや懸けられけん、幼き者を今一度見ばや」とこそ仰せられけれ。
- 六 雲もみな波とぞ見ゆる海士もがな、いづれか海と問ひて知るべく。
- 七 月をだに飽かず思ひて寝ぬものを時鳥さへ鳴きしきるかな。

八 義經馬を海中に乗入れて戦ふ折しも、勝ばさみたる弓を取落したり。

九 源氏の兵ども、いかなる御寶なりとも、いかでか御命には代へ給ふべき。その弓捨て給へ」と申す。

一〇 義經、弱き弓を敵に取られて、これこそ源氏の大將が弓よ」と嘲弄せられんが口惜しければ、命に代へて取りたるぞや」といふ。

一一 鳥獸すら恩を知るといふ。ゆめ忘るなよ、君の深き御恵みを。

一二 人はただ誠の道を守らなむ高きいやしきしなはありとも。

一三 事の趣旨は必ずしも反對すべきにあらざれども、實行方法にはなほ攻究を要するところあり。

一四 父は國事をのみ憂へて、家事を顧るいとまなかりき。

一五 汝の命は御國にさげしものなれば、生きて歸らんとと思ひぞ。

第三篇 品詞の轉成と語の構造

第十七章 品詞の轉成

〔吉〕

(甲) 旅人に道を問はれて、親切に教へたり。

(乙) 旅人は親切なる教へに感謝せり。

(甲)の「教へ」は動詞として用ひられてゐるが、(乙)の「教へ」は、それから轉じて名詞となつてゐる。かやうに、或品詞に屬する語が、意味用法を變じて、他の品詞となる事を品詞の轉成といふ。

○品詞の轉成には、次のやうな種々のものがある。

一 名詞になつたもの

動詞の連用形から

舞まひ 悟さと 流ながれ 恥はぢ とめ(人名) そめ(人名)

動詞の終止形から

相撲ひま 陽炎やひろう 向ふむかの岡おか 勉つと人名 透とほ人名

形容詞の連用形から

近くちかくに移る 遠くとほくより來る 多くおほくを望のぞます

形容詞の終止形から

からし(辛) すし(鮓) おもし(重鎮) 正ただし人名 尊たかし人名

感動詞から

あはれを催もよほせり

二 代名詞になつたもの

名詞から

君 僕 わらは

三 動詞になつたもの

名詞から

てきたきた(敵對) さいしく(彩色) さうぞく(裝束)

四 形容詞になつたもの

名詞から

大人おとなし まことし

動詞から

いさまし 煩わづらはし 願ねがはし うらめし たのもし

副詞から

甚いたし 未いまだし のどけし 靜しずけし

五 副詞になつたもの

名詞から

つゆ知らず ゆめ忘わするべからず

動詞から

たとひ死しすとも退ひかじ

六 接續詞になつたもの

動詞から

陸軍及び海軍

副詞から

山また山を越こゆ。はた もつとも

七 感動詞になつたもの

代名詞から
副詞から

おのれこの怨は忘れぬぞ。
いかに辨慶之を何とか見る。

一七

次の文から轉成の品詞を選び出し、何から轉じたかを述べよ。

- 一 兄弟の考には甚だしき隔りありて、二人にては之を決すること能はず、そのさばきを父に請へり。
- 二 頼もしき少年よと望をかけられたりし友の逝きしは、はや十年の昔となりぬ。
- 三 君がかゝる大志を懐かるゝをつゆ知らずして、今日までたゞの客として遇しけることの恥かしさよ。
- 四 たとひ死すとも悔なしとする意氣を以てせば、いかに煩はしき事なりとも、必ず成功すべきものぞ。
- 五 明日午前中に御出で下され度候。もつとも御都合により、午後に

第十八章 複合語

〔七〕 二つ以上の單語が合して一語となつたものを複合語といふ。複合語は、文法上一つの單語として取扱はれ、何れかの品詞に屬する。

○複合語の主な種類は次の通りである。

一名詞

石山	本箱	八重櫻	インキ壺	(名詞と名詞)
紙挾	梅干	鉛筆削		(名詞と動詞)
釣竿	枯葉	あき瓶		(動詞と名詞)
討死	往來	立居		(動詞と動詞)
たゞもの		また侍		(副詞と名詞)

國々 日々 一つく

(同じ名詞と名詞)

右の通り、動詞が複合語をつくるには、連用形を用ひるのが常である。然るに形容詞はその語幹を用ひるのが通則である。

淺瀬 遠目 薄色 廣場 嬉し涙 夜寒 日長

末廣 賣り高 高笑 遠廻 長生 遠淺

二 代名詞

わ殿 (代名詞と名詞)

ここかしこ あなたこなた (代名詞と代名詞)

三 動詞

かへりみる 落ちいる こひねがふ (動詞と動詞)

心みる(試) 名のる 物語る (名詞と動詞)

近づく 長びく 遠ざかる (形容詞と動詞)

「罪す」勉強す「信ず」なども複合動詞である。

四 形容詞

後暗し 肌寒し 心よし快 (名詞と形容詞)

有り難し 待遠し 讀み易し (動詞と形容詞)

細長し 重苦し 薄暗し (形容詞と形容詞)

五 副詞

常に 嚮に もとより (名詞と助詞)

なにとぞ いづくにぞ(いづくんぞ) (代名詞と助詞)

すべて 定めて しきりに (動詞と助詞)

成るべく 絶えず (動詞と助動詞)

さぞ たゞに (副詞と助詞)

六 接續詞

故に 爲に (名詞と動詞)

されど 然らば よつて (動詞と助詞)

又は 但し しかも (副詞と助詞)

注意 「人々」「なに／＼」などのやうに同じ語を重ねて出來た複合語を特に疊語といふことがある。

(七) 單語が合して、複合語となる時、その單語の音が變ずる事がある。

連濁

かね(金) | もの(物) | かなもの(金物)
 こゑ(聲) | いろ(色) | こわいろ(聲色)
 はる(春) | あめ(雨) | はるさめ(春雨)
 ほん(本) | たな(棚) | ほんだな(本棚)

この中、たなが「ほんだな」となるやうに、下の語の最初の音が濁音になる事を連濁といふ。

練習題

一八

- A 次の文から複合語を抜き出して、それがいかなる品詞に屬するか、又いかなる語から出來てゐるかを述べよ。
- 一 一つの雨粒は小なれども、多く降り續けば、橋を墜し田畑を流す事あり。
 - 二 心もとなき日數かさなるまゝに、白河の關にかゝりて旅心さだまりぬ。

- 三 去るものは日々に遠ざかり、來るものは刻々に近づく。
- 四 月日は過ぎ行けども、忘れ難きは、旅順に負傷して道傍の草原の中に倒れたる時なり。
- 五 魚は至つて清き水には棲ますして、却つてやゝ濁れる水に棲む。
- 六 いづかたに志してか日ざかりのやけたる道を蟻の行くらむ。

B 次の語の品詞とその成立とを述べよ。

道幅 雨乞 テーブル 掛
 おもんばかり(慮) おとしいる(陷) 追ひ拂ふ つまづく(蹶)
 みにくし物 むしあつしり ますく(繁昌す) 極めて(巧なり)
 みだりに(入場するなかれ)

第十九章 接頭語・接尾語

〔三〕

小松 初荷 さまよふ

右の「小」「初」「さ」のやうに、いつも他の語の上に附いて、或意味を加

接頭語

へるものを接頭語といふ。

〔七〕

時めく 神さぶ 海邊

右の「めく」「さぶ」「邊」のやうに、いつも他の語の下に附いて、之に或意味を加へるものを接尾語といふ。

接尾語

〔五〕

接頭語及び接尾語は、決してそれだけでは用ひられず、必ず他の語に附いてあらはれる。かやうなものを接辭といふ。

接辭

接辭が附いたものは、文法上、一語として取扱ふ。

接頭語と品詞

〔六〕

接頭語の附いて出來た語の品詞は、もとの語と同一である。

○接頭語の主なものとは次の通りである。

はつ雪	おほみ神	おん心	御機嫌	を田	小山
み山	まん中	き藥	す手	さ夜	(名詞)
ほの見ゆ	いや増す	た謀る			(動詞)
小高し	か弱し	を暗し	た易し		(形容詞)

〔七〕

接尾語の附いて出來た語の品詞は、接尾語によつてきまる。

接尾語と品詞

○接尾語の主なものは、次の通りである。

一 名詞又は代名詞を作るもの

大佐殿	齋藤君	皇子たち	親ども
殿ばら	汝等	河邊	
二枚	三疋	四冊	五番
重み	厚さ	嬉しさ	怖け

二 動詞を作るもの

伴なふ	學者めかす	大人ぶ	才子ぶる
色ばむ	嬉しがる	花やぐ	

三 形容詞を作るもの

學者らし	序がまし	露けし	愛たし
------	------	-----	-----

四 副詞を作るもの

身づから	手づから		
若やかに	うれしげに	面白げに	

○若やか「うれしげ」「面白げ」は語幹となつて第二種の形容動詞をつくる。

A 次の文から接辭の附いてゐる語を選び出し、その成立を説明せよ。

一 眞夜中に峠を越えて東に下れば右の方に燈火のほの見ゆるに、かかるみ山の奥にも人は住むにやと、人々あやしがる。

二 時の經つまゝに悲しさいや増して、堪ふべくもあらざりき。

三 さ夜ふけてはの暗き燈の影、ものさびし。

四 片田舎より差出でたる人こそ、萬づの道に心得たる由のさしいらへはすれ。

五 若君も十五歳の初陣には、見事なる御手柄をたてられたり。

六 煙たなびく村の方より、小高き岡に沿うて流るゝが、なつかしき旭川なり。

B 次の語から接尾語を抜き出し、且つその語の品詞を考へよ。

宮がた をかしさ 第三號 恥かしがる 隔てがまし

高ぶる しのびやかに 深み 鹽け 黄ばむ

第四篇 文の成分

第二十章 文と文の成分

〔夫〕

月は昇れり。
庭の櫻も美しく咲きたり。

右の例は、何れも一つの纏まつた思想を言ひ表はす一つ々きのことばである。即ち文である。

○文の終では必ずことばが切れる。文字で書く時は。を附ける。

すべて、文は單語から成立つものである。然るに、右の文の中の「月は」昇れり、「庭の櫻も」及び「美しく咲きたり」も、亦いくつかの單語が結合して或意味を表はしてゐるが、未だ全部が一つに纏まつて一つの文を成すに至つてゐない。このやうに、二つ以上の單語が結合してゐるが、まだ一つの文になつてゐないものを

文

連語といふ。

月は 庭の 櫻も 汝に これも

庭の櫻 我が身 飛ぶ雲 暑き日

書を読む 何處へ行く 山に登る

美しく咲く 頗る高し いと穩かなり

昇れり。 咲きたり。 讀まず。 犬なり。

これ等はすべて連語である。その中、昇れり、「咲きたり」、「讀まず」、「犬なり」のやうに、助動詞が他の語に附屬したものを活用連語といふ。

〔五〕 (甲) 日 は 西 に 没 し たり。

(乙) 月 山 より 出 づ。

右の文の中、(甲)は六つの單語から、(乙)は四つの單語から成立つてゐる。その中、「は」「に」「たり」「より」は何れも附屬する語であつて、

いつも、「日」「西」「没し」「山」のやうな獨立する語と共に用ひられ、これ等の獨立する語が無ければ決して用ひられない。故に、右の文は、それ／＼

(甲) 日 は 西 に 没 したり。

(乙) 月 山 より 出 づ。

の三つの部分から成立つものと見る事が出来る。これ等の部分は、相合して一つの纏まつた思想を表はし、一つの文となるのである。このやうに、文を組立てる各部分を文の成分といふ。

○文の成分には必ず獨立する語がある。附屬する語は、それだけで文の成分となる事はない。

〔六〕 文の成分には主語・述語・修飾語の三種と、外に獨立語といふ特別なものがある。

練習題 二〇

A 次の文から活用連語を選び出せ。

- 一 諸君は、人にほめらるる人物となるべし。
- 二 日本帝國は、比類なき勝れたる歴史を有する國なり。
- 三 われ等は、この歴史を汚さざらんが爲に、常に滅私奉公を心がけざるべからず。

B 次の文を成分に分ち、その中の獨立する語と附屬する語とを指摘せよ。

- 一 獨逸軍はバリーに迫れり。
- 二 全軍勇んで出發せり。
- 三 清正は忽ち正國をねぢ伏せたり。
- 四 國民は遠く海外に出でて、われ等を歡迎する地に移住せよ。
- 五 我等の祖先は、西邊より起りて東國に移り、其處の他民族を同化して、この國を建て、帝業を創めたるなり。

第二十一章 主語と述語

〔八二〕

(甲) 花 咲く。

(乙) 波 高し。

(丙) 我は 日本人なり。

右の(甲)の文は、「何が、どうするか」を表はし、(乙)の文は、「何が、どんなであるか」を表はし、(丙)の文は、「何が、何であるか」を表はしてある。その中、「咲く」「高し」「日本人なり」のやうに、何が「どうするか」「どんなであるか」「何であるか」を表はす成分を述語といふ。また、「花」「波」「我は」のやうに、「何が」を表はす成分を主語といふ。

〔八三〕 主語になる語

(甲) 體言

花 咲く。

山も 見ゆ。

此處は 涼し。

誰か ある。

○この場合に體言の下に助詞を附ける事が多い。但し口語で「花が咲く」のやう

に體言の下に助詞がを附ける場合に文語では助詞を附けないのが普通である。

(乙) 用言又は活用連語の連體形

新しきがよきなり。

言ふは易く、行ふは難し。

驕らざるもまた減ぶ。

○この場合に用言活用連語の下に助詞が附くのが普通である。口語では新し
いのが言ふのはのやうに連體形の下に第三種動詞のが來るが文語にはかや
うな助詞は用ひない。

(丙) 對等の體言の重なつたもの

米・生絲・杉材はこの地方の重要産物なり。

範頼と義経は兵を率ゐて西へ向へり。

東大寺及び興福寺は奈良にあり。

○この場合に助詞又は接續詞によつて體言を結び附ける事がある。

(八三) 述語になる語

(甲) 用言

授業 終る。 授業 終れり。

月 清し。 月 清からん。

何事も なかれかし。

○この場合に助動詞又は助詞を伴ふ事がある。

(乙) 體言

汝 何者なるぞ。

使者は 汝か。

彼は 何者ぞ。

われこそ 俊寛よ。

缺席者は 三人のみ。

○體言には指定の助動詞又は第三種の助詞を伴ふのが普通である。



(丙) 種々の語に動詞・形容詞の附いた連語

此處は 古戰場にて候。

鯨は 魚にあらず。

性質も 快活にはあらず。

御心も 優しうします。

憂かりし 昔は 戀しくもなし。

殿下も 臨場し給ふ。

萬民 君徳を 仰ぎ奉る。

老臣等は 幼主を 扶けまゐらせたり。

〔八四〕 同じ主語に對する述語が、對等の資格で重なる事がある。

稻は 發育し、みのれり。

園内は 廣くして 美し。

人々は 驚き かつ 喜べり。

述語が重なるもの

彼は 温良にして かつ 恭謙なり。

○この場合に接續詞助詞を用ひる事がある。

練習題

三二

次の文の主語と述語とを指摘し、それが如何なる語から成立してゐるかを説明せよ。

一 授業終る。

二 残月淡し。

三 なつかしきは故郷なり。

四 人々は怒りかつ悲しめり。

五 攻むるは易く、守るは難し。

六 忠と孝とは缺くべからず。

七 海上は静かにして鏡の如し。

八 彼は醫師にしてかつ畫家なり。

九 受賞者は級長並びに副級長のみなりき。

第二十二章 修飾語

〔八五〕

二人の 旅人は いたく 驚けり。

右の例の「二人」は主語たる體言「旅人」に附いて、その意味を委しく定め、いたくは、述語「驚けり」に附いて、その意味を委しく定めてある。それ故「二人の」「いたく」は修飾語である。

蠶は 繭を つくる。

蛹は 蛾と なる。

右の「繭を」「蛾と」は、何をつくるか、何となるかを示して、漠然たる「つくる」「なる」の意味を精密にし、定めるものである。それ故に、「繭を」「蛾と」も修飾語と見るべきである。

○右の「繭を」「蛾と」は、また用言「つくる」「なる」の意味の缺けた所を補ふものと見る事が出来る。それ故かやうなものを特に補語といふ事がある。

修飾語

補語

連體修飾語
連用修飾語

連體修飾語に
なる語

〔八六〕

修飾語には二種ある。前の例の「二人」のやうに、體言を修飾するものを連體修飾語又は形容詞的修飾語といひ、いたく「繭を」「蛾と」のやうに、用言を修飾するものを連用修飾語又は副詞的修飾語といふ。

〔八七〕 連體修飾語になる語

(甲) 體言その他の語に助詞「の」「が」の附いたもの

北の 風。 　　いづこの 人。

今日までの 成績。 　　友よりの 電報。

しばしの 別。 　　たまくの 面會。

面白の 景色。 　　羨しの 風情。

我が 國。 　　誰が 宿。

君が 代。 　　重盛が 子ども。

○古代語には、「の」の代りに「つ」を用ひたものがある。「國つ」「神つ」「白浪」など。

(乙) 用言又は活用連語の連體形

散る 花。 盗る 水。 靜かなる 夜。
睦じき 友。 鳴かぬ 鳥。 堅固なりし 防備。

(丙) 對等の體言又は用言が重なつたもの

忠臣・孝子の 事蹟。
太く短き 棒。

東洋と西洋の 獨立國。

佛教並びに儒教の 影響。

穩健にして適切なる 説。

強くして、しかも優しき 武士。

○この場合に助詞又は接續詞を用ひる事がある。

(八) 連用修飾語になる語

(甲) 副詞

連用修飾語になる語

道は 頗る 峻し。

汽車は 既に 出發せり。

月は さながら 盆の如し。

彼は 少しも 知らざりき。

(乙) 形容詞の連用形

友は 早く 歸り去れり。

選手等は 勇ましく 出發せり。

予も 嬉しくは 思はざりき。

(丙) 體言

試験は 昨日 終れり。

右翼は 二籽 進出せり。

書 讀む 暇も なし。

船は 東へ 向へり。

溺るゝ 者は 藁をも つかむ。

山田氏は 詩に 巧なり。

千里の 路も 一步より 始まる。

○この場合に體言が單獨に用ひられるものもあり、又助詞が附くものもある。

○口語で助詞を附ける場合に、文語では附けない事がある〔花見る人など〕。

〔丁〕 用言又は活用連語

言はぬは 言ふに まさる。

彼は 大言するを 好まず。

憂は 豫め 憂へざるより 起る。

○以上は用言活用連語の連體形に第一種助詞が附いたものである。口語では

言ふのに「大言するの」をのやうに多くの場合は第三種助詞のを附ける。

某は 傲慢なれば、人に 厭はる。

弟は 怖れて 自後 池に 近づかず。

予は 口惜しけれども 黙せん。

友は 笑ひつつ 語れり。

汝 苦しくとも 忍耐せよ。

○以上は用言に第二種の助詞が附いたものである。

〔戊〕 對等の體言が重なつたもの

秀吉 家康・利家を 招く。

吾等は 京都と奈良に 宿泊せり。

暴風は 今夕又は明朝 襲來すべし。

某は 支那史並びに印度史に 精通す。

○この場合に助詞又は接續詞を用ひる事がある。

〔八九〕

若き 熱心なる 研究家は、終に 成功せり。

市内の 多くの 古き 建物は、かくて 焼失せるなり。

若葉は ひらくと 風に ひるがへる。

隊長は 夜半 急に 部下をして 河を 渡らしむ。
右のやうに、同じ語に二つ以上の修飾語が附く事がある。

〔五〕

東に やゝ 高き 山 あり。
人を 恐るゝ 犬は 吠ゆ。
彼は 最も 困難なる 問題を 解決せり。

右のやうに、修飾語は、他の修飾語に附く事がある。

〔六〕

木の間に 高き塔と大なる屋根 見ゆ。
春の花と秋の月との 優劣を 論ず。
峯を攀ぢ谷を渉る 險路。

かやうに、修飾語が對等の體言又は用言のそれ々に付き、それ等が合して一の成分となる事がある。

練習題

三

修飾語が他の語と共に一の成分となるもの

次の文から修飾語を選び出し、いづれの語を修飾するか、又いかなる種類の修飾語であるかを述べよ。

- 一 國民は自國の特長を知らざるべからず。
- 二 わが國は古來東海の君子國と呼ばれたり。
- 三 日本國民は一般に清淨の美を賞す。
- 四 秀逸と稱せらるゝ和歌は、この清淨美を捉へたるものなり。
- 五 鹿を追ふ獵師は山を見ず。
- 六 主従はしばしの別を惜しみたり。
- 七 昨夜の風雨全く霽れて、日は麗かに昇りぬ。
- 八 荷田春滿、賀茂眞淵、本居宣長、平田篤胤を國學の四大人といふ。
- 九 新院は齋院の御所より北殿に遷らせ給ふ。左府は車にて參り給ふ。

一〇

目的地に達せる時は、一同疲勞の極にありき。

第二十三章 獨立語

〔九二〕

いざ、われ等も出發せん。

空は晴れたり。されど海上は波高し。

右の文に於て、「いざ」「されど」は、文の成分ではあるが、主語・述語・修飾語の何れでもなく、他の成分とは直接の關係が無く、比較的獨立したものである。かやうな成分を獨立語といふ。

〔九三〕

獨立語には(一)感動又は應答を表はすもの、(二)呼び掛けるもの、

(三)特に重要な事物を提示するもの、及び(四)接續の意味を表はすものがある。

〔九四〕

獨立語になる語

(甲) 感動詞

あはれ、花も散らんとす。

獨立語

獨立語の種類

獨立語になる語

や、殿は何と仰せられ候ぞ。

いな、これは見るべきものにあらず。

すはや、敵の現れたるぞ。

いかに、辨慶、敵に弓勢を見せよかし。

(乙) 體言

嗣信、いかゞ覺ゆるぞ。

者ども、進めや、進め。

蝶よ、菜の葉にとまれ。

○以上の如く體言は呼び掛けに用ひられる。

昭和十二年七月七日、國民は永くこの日を忘るべからず。

大日本帝國は、萬世一系の天皇之を統治す。

電燈も、その發明者はエヂソンなりき。

○以上の如く體言は提示にも用ひられる。

(丙) 接續詞

道は峻しきにあらず。されど、歩行頗る困難なり。
千丈の堤も蟻穴より頽る。故に、小事とて看過すべからず。
敵國外患あれば、則ち、その國安し。
家富めども、しかも、心驕らず。

○右のやうに接續詞が接續の意味をもつて獨立語となる。

(丁) 體言が重なつたもの

月・雪花、この三者は古來詩人の賞するところなり。
山・と海と、汝は何れを好むか。

鐵道大臣又は内務大臣は、當分總理大臣之を兼任す。

注意

獨立語は主語・述語・修飾語以外の成分である。それ故その意味や形から獨立語のやうに見えるものであつても主語・述語・修飾語と見る事が出来るものは獨立語として取扱はない。

獨立語に修飾語が附く

(九五)

體言の獨立語には、修飾語が附く事がある。

一時の安易、絶えず戒愼せざるべからざるはこれなり。

練習問題

三三

A 次の文から獨立語を選び出せ。

- 一 鐵道信號、これには常置信號と手相圖てあひづと列車信號とあり。
- 二 あゝ、壯なるかな、その意氣や。
- 三 誇大の言語を弄するは易し。されど、適當の言語を選ぶは難し。
- 四 自然の意味は、自然のみ之を知る。(ゲーテ)
- 五 いかにも、母御前父はいづくにおはしますぞや。

B 次の傍線を施した部分は、成分上何に屬するかをいへ。

- 一 再び實なる木は、その根必ずいたむ。
- 二 山の麓は、雪や降るらん。

- 一〇 九 八 七 六 五 四 三 二 一
- C 次の文を成分に分ち、その種類をいへ。
- 一 公園の花も、はや咲きたり。
 - 二 良薬は口にはがし。
 - 三 笑ふ門には福来る。
 - 四 悪人に愛せらるゝは、憎まるゝより危し。
 - 五 この軍に戦死せる人々、その名は既に發表せられたり。
 - 六 犬はよく人に馴る。
 - 七 彼は有名なる倫理學者なれども、道德家にはあらず。
 - 八 われ等は、初對面の人より、ねんごろなる待遇を受けたり。
 - 九 若人よ、時には静かに反省せよ。
 - 一〇 武士の子は、雄々しく優しく育てられたるなり。

一 (修) 述
二 (修) 主
三 (修) 述

主語 述語

修飾語と修飾せられる語

第二十四章 文の成分の位置と省略

〔九六〕 一つの文の中の種々の成分の並べ方には、一定の順序がある。

日本は 神國なり。

風 烈しく、浪 高し。

かやうに、主語は初に、述語は終に来るのが普通である。

夏の 日光は さんくくと ぶりそいぐ。

敵は 堅固なる トイチカに 據れり。

かやうに、修飾語は修飾せられる語の前に来るのが普通である。

予は 珍しき 愉快なる 話を聞けり。

弟は昨日 友より 辭書を 借りたり。

第二十四章 文の成分の位置と省略

先日の 關東地方の 大雨は 各地に 大損害を
與へたり。

右のやうに、同じ語に對して二つ以上の修飾語がある場合に、ど
れが前に來るか、は定まりが無い。

さても、はかなきは人の命かな。

滅私奉公、國民は寸時も之を忘るべからず。

智者も千慮に一失あり。故に、過を見て直ちにその人
を侮るべからず。

右のやうに、獨立語は、文の最初に來るのが普通である。

〔五〕 歌へよ歌へ 若人は、

二つ以上の修飾語

連用修の重なり

一状態 (副修)

三、実作

倒置

池中に 島あり。
事件は 解決せりや、豫想の如く。
とまれ 胡蝶よ、菜の花に。
右のやうに、語勢を強め又は語調を整へる爲に、成分の普通の位
置を變へることがある。これを倒置といふ。

〔六〕 (汝は) 直ちに 出發せよ。

汝は (之を) 知らずや。

片桐殿には これより 何處へ (參らるゝか)。

堪忍は 一生の 實なり。

前後の關係や、その場の事情で、容易に補ひ得る文の成分は、右の

やうに、之を言ひ表はさない事がある。之を省略といふ。

練習題

二四

次の文に成分の倒置又は省略があつたら指摘せよ。

- 一 道路の左側を通行すべし。
- 二 東京は昔江戸といへり。
- 三 節儉は諸徳の母。
- 四 千里の道も一歩より。
- 五 思はざりき今日この事あらんとは。
- 六 屋外は風雨の聲もの凄し。午後犬を伴なうて散歩す。林に入りて黙坐す。水林より出でて林に入る。落葉を浮べて流る。
- 七 謂ふなかれ今日學ばずして來日ありと。
- 八 熊谷の後より武者こそ二騎つゞいたれ。熊谷誰そと問へば、季重と答ふ。「問ふは誰ぞ。」直實ぞかし。「いかに熊谷殿はいつよりぞ。」宵より」とこそ答へけれ。

第五篇 文の構造と文の種類

第二十五章 文の構造と節

〔九〕 文の成分は、主語・述語・修飾語及び獨立語である。文は通常、これ等の成分が結合して出来るものである。その中、最大切なものは主語・述語であつて、文は普通、主語・述語が中心となつて成立し、或場合には之に獨立語が加はり、又、これ等の成分に、一つ又は多くの修飾語が附いて、複雑な形になるのである。

關ヶ原の 古戰場は この 山の 向側に
修 主 修(三) 修(三) 修(二)

あります。 (口語)
述 獨

熱烈なる 愛國心、これこそ 國家を 支ふる
修 主 修(二) 修(二)

柱石なれ。^述

一善を興すは一悪を除くに如かず。^{修(二) 修(二) 述}

〔100〕主語述語又は獨立語と、之に直接間接に附く成分とを合せて、**主部・述部**及び**獨立部**と名づける。さすれば、文は、

主語又は主部——述語又は述部

又は、之に獨立語又は獨立部の附いたものから成り立つのが常である。

關ヶ原の古戰場は、この山の向側にあります。^{主部 述部} (口語)

熱烈なる愛國心、これこそ國家を支ふる柱石なれ。^{獨立部 主語 述部}

一善を興すは、一悪を除くに如かず。^{主部 述部}

主語・述語を省略した文

〔101〕かやうに、主語・述語は大切なものであるけれども、前後の關係

又はその場の事情で明かにわかる場合には、之を省略して言ひ表はさない事がある。その場合にも之を一つの文と見る。

進め。早く來い(口語) 悲しいかな、殿はいづこに。

〔101〕(甲) 電燈が消えた。(口語) 月清し。

(乙) 電燈の消えた時は、八時頃であつた。(口語) 予は月清き夜を好む。

(甲)の例は、主語と述語とがあつて、纏まつた思想を表はす完全な文である。然るに、それが(乙)の如く用ひられると、他の文の一部分となる。かやうに、主語・述語を具へた一つの文と同等なものが、他の文の一部分になつたものを**節**といふ。

〔101〕 日の暮れるのが、早くなつた。(口語) 言葉のぞんざいなのも、いけない。(口語)

節

主語節

かやうに、文の主語として用ひられた節を主語節といふ。

○主語節では、述語が連體形になり、その下に種々の助詞を附けるのが普通である。但し、文語では助詞を附けない事がある。

〔108〕 齋藤は 頭がよい。(口語)

高野山は 弘法大師が開いたので。(口語)

東京は 人口多し。

この書は 孔子の作れるなり。

かやうに、文の述語として用ひられた節を述語節といふ。

○述語節では、述語は普通の文そのままか又は連體形に(口語では連體形に)のをつけたものに助動詞を附ける。

〔109〕 形のよい 山が見える。(口語)

汽車は 秋草の盛りな 野を進む。(口語)

我等は 老杉の並立せる 參道に達せり。

自信なき 言は弱し。

かやうに、連體修飾語として用ひられた節を連體修飾節といふ。

○連體修飾節の述語は連體形をとる。

〔110〕 (甲) 私も 氣持よく 話した。(口語)

先生は 言葉やさしく 諭しけり。

我が艦隊は 威風堂々と 入港せり。

(乙) 誰も 子供の泣くのに 閉口した。(口語)

私共は 演説の始まるのを 待つてゐた。(口語)

予は 櫻のいさぎよきを 愛す。

落花は 蝶の舞ふに 似たり。

(丙) 鐘が鳴つたが 先生はまだ見えない。(口語)

連體修飾節

連用修飾節

天氣が悪いので 人出が少い。(口語)
始よければ 終もよし。

春は来れども 寒さ未だ去らず。

かやうに、連用修飾語として用ひられた節を連用修飾節といふ。

○連用修飾節は(甲)では述語が形容詞の連用形又は副詞そのまゝである。(乙)では連體形の述語に(口語)では連體形の述語の下に第三種の助詞「の」が附いたものに第一種の助詞が附く。(丙)では述語たる用言に第二種の助詞が附く。

〔10F〕 齋藤の缺席したのは これには少し譯がある。(口語)

君が失敗するとは これは全く意外だつた。(口語)

平氏の滅亡せるは 中心人物の缺乏がその主因となれるなり。

同じ枝をわきて木の葉のうつろふは 西こそ秋の初なりけれ。

獨立節

かやうに、獨立語として用ひられた節を獨立節といふ。

○獨立節は、述語が連體形で、その下に種々の助詞を附ける事が多い。

從屬節

〔10G〕 主語節・述語節・連體修飾節・連用修飾節・獨立節は、何れも一つの文の成分をなすものである。このやうな節を從屬節といふ。

〔10H〕 山が峻しく、谷が深い。(口語)

松青く、砂白し。

對立節

右の文に於て、傍線を附けた部分は、何れも節であるが、その節は文の或成分になつてゐるのではなく、互に對等の資格で結合して、一つの文を組立ててゐる。かやうな節を對立節といふ。

〔10I〕 對立節の中、最後にあるものの外は、いつも下の對立節に連續するものである。かやうな節は、その述語の部分が特別の形となる。

(甲) 兄は耕し、弟は草をとる。(口語)

雨も降るし。風も吹く。(口語)
 汽笛も鳴れば。サイレンも鳴る。(口語)
 病は口より入り。禍は口より出づ。

○右のやうに動詞は連用形となる。口語では第二種の助詞「しやば」を用ひる事もある。

(乙) 道も遠く。夜もふけた。(口語)

海が浅くて。水が濁つてゐる。(口語)

庭も広いし。家も大きい。(口語)

品もよければ。値段もやすい。(口語)

日なたは暑く。日かげは涼し。

鶴の脛は長くして。鴨の脚は短し。

○右のやうに形容詞は連用形を用ひるか又は之に口語は「て」文語は「して」を付ける。口語では助詞「しやば」を用ひる事もある。

中止法

○動詞形容詞の連用形そのまゝが右のやうな節の述語に用ひられた場合には之を中止法といふ事がある。

(丙) 海が穏か。波がない。(口語)

國平かに。民安し。

品行方正。學術優等なり。

○右のやうに形容動詞第二種に屬する語は、口語では語幹に「て」を付け文語では語幹に「に」にして「に」してを付ける。又語幹が漢語である場合には語幹そのまゝを用ひる事がある。

(丁) 草茫茫として。人跡絶えたり。

海漫々。風浩浩たり。

○右のやうに文語の形容動詞第三種は語幹に「として」を付け時として語幹そのまゝを用ひる。

(戊) 範頼は兄で。義経は弟だ。(口語)

父は軍人に。子は音楽家なり。

花は紅 柳は緑なり。

○右のやうに體言を述語としたものは、口語では「で」、文語では「にて」にして、を附けるのが普通である。又時には體言そのままを用ひる。

練習問題

三五

A 次の文を主部・述部・獨立部、又は主語・述語・獨立語に分けよ。

- 一 この雨は、なかくやむまい。(口語)
- 二 例の事件ね、あれはうまく解決されましたよ。(口語)
- 三 東西に對立する東京と大阪、これ我が國の二大都市なり。
- 四 利根・氣根・黄金の三こんは、事を成すに缺くべからず。
- 五 われは十一歳の秋より繪畫を習へり。
- 六 衆人の前にて我が主を辱しめたる者は何人ぞ。
- 七 薄き濃き山の紅葉はさながら錦を織れるが如し。

B 次の各例は文と見るべきか否かを述べよ。

- 一 「おい、待て。」私ですか。(口語)

- 二 「困つたな。」どうしたのです。(口語)
- 三 「やよ、汝は。」御内の者に候。
- 四 「さてその返答は。」只今は申さじ。
- 五 義經、さては案内よく知つたるらん。老翁いかでか存知仕らでは候ふべき。義經、さぞあるらん。

C 次の文の傍線を附けた節の種類を問ふ。

- 一 私の起きたのは五時でした。(口語)
- 二 父も近頃白髪が多くなりました。(口語)
- 三 私は社會の複雑なのに驚きました。(口語)
- 四 波の音もかすかなる物思まさる夕なりき。われひとり宿を立出でて、海邊をさまよふ。入日の影は雲にのみ残りて、月未だ昇らず。夕なぎに千鳥の鳴くを聞きつゝ進めば、いつしか身の病むをも忘れて、心自ら平らかなり。白砂に足を投げ出して、心の安らかなるは、境の然らしむるところか。など思ひ耽ること多時。ふと願れば、

- 東天の著しく明きは、やがて月の出づるを報するなりけり。
- この歌は紀貫之の詠めるなり。
- 彼の幼時苦學せるは、人多く之を知らず。
- 霜は木々の梢を色美しく染め出せり。
- 花笑ひ、鳥歌ひ、天長閑に霞み、水緩やかに流る、春の日に當りても、快き事のみ懐に満つべくはあらず。

D 次の文に、いかなる節があるかを示せ。

- 一 サイレンが鳴ると、直ぐ燈火が消えた。(口語)
- 二 君達がさう言つてくれるのは、それは本當に有難い。(口語)
- 三 歴史の成績は甲で、地理は乙だった。(口語)
- 四 孔子は正義の念強き人なりき。
- 五 人々は靜肅に式のはじまるを待てり。
- 六 選手等は意氣揚々と入場せり。
- 七 人の失敗するは、多く注意の足らざればなり。

- 八 君の奮闘せられしは、われ等も確かに之を認む。
- 九 成敗は時の勢によりて分れ、是非は後世の論によりて定まる。
- 一〇 我他に對して同情を缺かば、他人もまた白眼を以て我を視るべし。
- 一一 西風冷かにして、慘たる鳥聲秋の恨を語る。
- 一二 意志の強きものは、世界をして自己を摸せしむ。(ゲーテ)

第二十六章 文の種類

〔二二〕 文は構造上から分類すると、次の三種となる。

單文 複文 重文

〔二三〕 雨が 降り出した。(口語)

演説は まだ終るまい。(口語)

春日 遅々たり。

若き日は 再び來らず。

單文

富士は 雲表に聳立す。

右の例のやうに、主語・述語の関係が一回しか成立せぬ文を單文といふ。即ち、單文は節を含まぬ文である。

桃や櫻は 散つた。(口語)

あ、見えた、尾が、足が、頭が。(口語)

奈良・京都は わが國の舊都なり。

水 清くして又冷かなり。

父も母も兄も弟も 驚きかつ喜べり。

右の諸例は、主語や述語が多くの語から成り、又は重なつてゐる。しかし、主語・述語の関係は唯一回だけしか成立たない。それ故、皆、單文である。

〔三〕 櫻の咲く頃は一番よい。(口語)

意志の強いのは彼の長所である。(口語)

單文の主語述語

複文

この器は亡父の愛玩せる遺品なり。

骨は朽つとも、名は朽ちじ。

浄土宗は、法然の開けるなり。

彼の失敗するなど、誰か之を信ぜんや。

右の例のやうに、文の成分に節がある文を複文といふ。複文は從屬節を有する文である。随つて、主語・述語の関係が二回以上成立つ。

〔四〕 土地が高くて 景色がよい。(口語)

色がきれいで 形も面白い。(口語)

地震ひ 火起る。

人に千日の好なく 花に百日の紅なし。

部下多く戦死し 食料乏しく、彈丸また盡きんとす。

右の例のやうに、對立節から成立つてゐる文を重文といふ。隨

重文

文の性質上の分類

つて、重文では、主語述語の関係が二回以上成立つ。

〔二五〕 文はその性質上から分類すると、次の四種となる。

平叙文 疑問文 命令文 感動文

〔二六〕 涼風がそよ／＼と吹く。(口語)

公報はまだありません。(口語)

百聞は一見に如かず。

やがて快報至らん。

事件はこれ以上發展せざるべし。

右の例のやうに、断定肯定否定や推量の意味を述べるだけの文を平叙文といふ。

〔二七〕 演奏が始まりましたか。(口語)

誰が承諾するものか。(口語)

汝何人なるぞ。

汝は之を我に語りしにあらずや。

人の命は、雨のはれ間をも待つものかは。

右の例のやうに、疑問の意を表はす文及び反語の意を表はす文を疑問文といふ。

〔二八〕 ちよつと待つて下さい。(口語)

そんな事は言ふな。(口語)

悪を友とするな。善を友とせよ。

急ぎいづかたへも忍ばせ給へ。

軒端の梅よ、春を忘るな。

いたくな歎き給ひそ。

右の例のやうに、命令禁止の意を表はす文を命令文といふ。

〔二九〕 おや、また曇つて來ましたね。(口語)

まあ、きれいな花ですこと。(口語)

疑問文

命令文

感動文

はかなき人生よ。
あなうれしや。

さても頼みがたき人の心かな。

右の例のやうに、感動の意を表はす文を感動文といふ。

〔110〕文語では、平叙文、疑問文を終止する用言又は活用連語が、助詞「ぞ」「なむ」「なん」「や」「か」を受ける時は、終止形の代りに連體形を用ひる。又「こそ」を受ける時は已然形を用ひる。之を係結かひりむすびの法則といふ。

緑なる一つ草とぞ。春は見し。秋はいろくの花にぞありける。

さらば、それになむ定むべき。

人々集まりて、今日は市の日になむ當りたる。とぞいふなる。この亂れに公卿の命をおとすこそ。浅ましけれ。

係結の法則

煙たなびく苦屋こ。そわが懐しき住家なれ。月や出でたる。

これよりいづかたへか進むべき。

注意一 副詞「い」か「が」を受けた活用語も亦連體形で終止する。

客のもてなし様は、い。か。があるべき。

注意二 係結の法則は活用語で文を終止する時に限つて行はれる。それ故活用

語が助詞を附け又は他の語に連る場合には適用されない。

うき世には長らへじとぞ。思へども……

古は車もたげよ。火かゝげよとこ。そいひしを……

注意三 「ぞ」「なむ」「こそ」を受ける用言を略することがある。

彼我互に戦備に忙しとぞ。聞く

人々はたゞ驚き怖るゝのみなりとなむ。いふ

いかさまさもあるべきにこそ。あれ

注意四 係結の法則は口語には行はれない。

練習問題

二六

A 次の文は、構造上如何なる種類に属するかを述べ、また節を含むものは、その節の種類を述べよ。

- 一 奈良も京都も古い帝都であつた。(口語) 單文
- 二 川幅が廣く、水量が多い。(口語) 重文
- 三 子供等は皆行儀がよい。(口語) 複文
- 四 規則正しく勉強しなければならぬ。(口語) 複
- 五 鯉は黒潮の流るゝ暖き海に棲む。複
- 六 われ等は心ゆくばかりその絶景を眺めたり。複
- 七 石炭の火は、木炭の火よりも熱度高し。複
- 八 金の貴きは、何人も之を知る。されど、鐵の貴きは、之を思ふ者多からず。複
- 九 能ある鷹は爪を隠す。複
- 一〇 内海の沿岸には名勝の地少からず。單

- 一一 年々花は變らねども、歳々人同じからず。複
 - 一二 清正と正國とは組みつほぐれつ互に争へり。單
 - 一三 清正、正國をねぢ伏すれば、正國は清正の鎧の裾をしつかとつかむ。
 - 一四 年少者は希望に生き、老人は追憶に生く。重
 - 一五 昔より賢き人の富めるは稀なり。複
 - 一六 風凧、日和らぎ、何處ともなく春意動きて、早咲きの梅五六輪村落の籬に香る。重
 - 一七 大勇は怯なるが如く、大智は愚なるが如し。重
- B 次の文は性質上どの種類に属するかをいへ。又、係結の法則の行はれてゐるものがあつたら、之を指摘せよ。

- 一 日の丸の旗が、ひらくと翻つてゐる。(口語) 平叙文
- 二 おう、今日は開校記念日だつたな。(口語) 感
- 三 みんな油断するな。しつかりしろ。(口語) 命
- 四 財寶は大路に引き散らされて、馬蹄の塵となれり。平

- 五 折に觸れば、何事かはあはれならざる。疑
- 六 まさなうも敵に後を見せ給ふものかな。感
- 七 ゆめ忘るゝなかれ、今の言を。仰
- 八 おほかた家居にこそ事ざまは推測らるれ。平
- 九 鹿の通はんする所を、馬の通はざるべきやうやある。疑 汝案内者せよ。疑「この身は年老いて、いかにもかなひ候ふまじ。」さて汝に子はなきか。疑「さぶらふ。」平
- 一〇 「さてその文は、いづくよりいづちへ參らせらるゝぞ。」これは京より、女房の、八島の大員殿へ參らせられ候。平源氏既に淀川尻に出で浮んで候へば、定めてそれをこそ告げ申され候ふらめ。平「げにさぞあるらむ。」平者ども、その文奪へ。命しやつ搦めよ。命罪つくり命に頸な切りそ。命
- C 次の文語文に誤があつたら正し、その理由を説明せよ。
- 一 われ等は君國の爲にこそ死すべきなり。

- 二 武士の戦場の露と消ゆるは、古今珍しくも候はぬ。
- 三 御自ら畑を耕させ給ふぞかしこけれ。疑
- 四 今朝はいかが覺ゆる。心地よきか。
- 五 日頃歎きつる心は、今日なん安らかになりぬ。疑
- 六 「君の爲に命を捨つるは、この時にこそ。」と思ひ定めたれ。疑
- 七 見る者皆感泣せりとなん聞えき。疑
- 八 「我こそ御行方知り參らせたり。」と申す者一人もなかりけれ。疑
- 九 「生をこの國に享けたるぞこよなき幸なり。」と古人もいはれたる。疑
- 一〇 人にこそ語らね。盡忠報國の念は何人にか劣るべき。五尺の身體は大なるにあらざれども、祖先より傳へたる血は全身に溢れたれ。疑
- D 次の文を成分に分けてその種類をいひ、且つ各文の構造上の種類を述べよ。
- 一 われ等は、いかなる困難に際會すとも、必ず之を突破すべき堅き意

志を有せざるべからず。
 二 夜冬の夜の澄める月に雪の光りあひたる空こそげにあはれ深きものなれ。
 三 春の花は概してあわただしく散れども、秋の花には久しきに堪ふるもの少からず。
 四 冬至も近づきて今年の日數も残り少くなれり。
 五 年の終るは惜しむべく、齡のかさなるはいとはしけれども、新しい年を迎ふるは喜ぶべし。

改制
新文典
 上級用 終

補充問題

一 (第二三章)

次の文の傍線を附けた語の品詞をいへ。

- 一 日本帝國は世界に類のない美しい立派な國である。(口語)
- 二 私は日本に生れたことを感謝しない日はない。(口語)
- 三 目的のあるところには必ず活動あり。活動は常に新趣味を伴ふ。されば世に生れて目的なき者は、遂に人生の趣味を解せざるべきなり。
- 四 かしこに見ゆるは寄手の軍か。いざ、打出でて一氣に蹴散さん。
- 五 君の主張は誤れるにはあらず。然れども、之を實行せしむるには更に一段の工夫を要す。
- 六 やあ、城門を攀ぢ登るは味方の兵なるぞ。あれ討たすな。續けや

補充問題

者ども、續け。

七 地球より太陽までの距離は、凡そ一億五千萬軒にして、月への距離の約四百倍に當るといふ。

補充問題 二 (第四十一章)

A 次の文から、名詞代名詞を抜き出し、代名詞はその種類をいへ。

- 一 事を會議に附するは、諺に、「三人寄れば文珠の智慧。」といふ趣旨に基づけるなり。
- 二 汝の説は實狀に適切なれば、誰か異議をはさむべき。予は雙手を舉げてこれに賛成せんとするものなり。
- 三 假りに月の直径を三糎とせば、地球の直径は十二糎、太陽の直径は實に十三米に達すといふ。
- 四 エマーソン嘗ていふ、雪なき所に文化なしと。これ文化が努力の賜物なる事を、最も巧妙に言ひ表はしたる名言なり。
- 五 ソクラテスとキリストとは、いづれもその天壽を全うするを得ず

して、悲惨なる最期を遂げたり。

B 次の傍線を附けた動詞の活用形を考へよ。

- 一 日はすでに没して足は疲れたり。人家あらば請ひて宿借らんと、一人とぼくと進む。
- 二 満山に響けと、あらん限りの聲を出して呼べども答ふる人はなく、たゞこだまの之に應ずるのみ。

C 次の文中の動詞の活用の種類をいへ。

- 一 今日は珍しくも雲收りて空の色も心地よければ、友を誘ひて利根川のほとりに遊ぶ。
- 二 見る度毎に新しきは、朽ちず盡きざる自然の様なりけり。
- 三 草も木も、緑美しき若葉を伸べて、活々と大氣を呼吸する様、誠に見ゆる心地す。
- 四 松が根に咲きたる一もとの花あり。蘭かと思へば蘭にあらずして、あらゝぎの花なりけり。

- 五 「一卵を盗む者は一牛をも盗まん」といふ西洋の諺は、悪の増長することを戒めたるものなり。故に悪しき事と知らば、たとひ小事なりとも、直ちに之をやめよ。
- 六 「死なば諸共にと誓ひし戦友と別れて、空しく病床に呻吟する身の口惜しきよ」と、白衣の袖をぬらすことも少からざりき。
- 七 義貞は大軍を率ゐて東國に向ひ、一擧に足利氏を撃滅せんとす。
- D 次の文から形容詞形容動詞を抜き出し、その活用をいへ。
- 一 手の悪しき人の憚らず文書き散らすはよし。見ぐるしとて人に書かするはうるさし。
- 二 慘澹たる苦心を重ねること十二年、彼は遂に大發明を完成して、赫赫たる名聲を博するに至れり。
- 三 正直なる者も、知識なければ重き任にたへず。知識ある者も、不正直なれば信任せられず。
- 四 心よからぬ者を友とすることなかれ。言葉の巧なる者に心を

許すべからず。

- 五 暑かるべき夏は、雨多くして涼しかりしが、秋に入りてより麗かなる日續きて、草花の色も一入美しく見ゆ。

E 次の文に誤があつたら正せ。

- 一 老ひてますく盛なりとは、彼の如き者をいふか。
- 二 予は、楠氏の傳を讀むでここに至る毎に、正成の心中を思ふて涙落つるを禁づる能はず。
- 三 久しゆう聞かざりし鳥の聲の、今朝しも朗かに聞えたる嬉しき、譬えん方もなかりき。
- 四 古諺に、笑う門には福來ると云えり。
- 五 彼は泣るて訴うれども、遂に容れられざりき。

- F 練習題一(八頁)の第六以下の文、練習題二(一二頁)の第五以下の文、及び練習題三のBの文(一四頁)から、動詞・形容詞を抜き出し、その活用の種類をいへ。

G 練習題一(八頁)の第六以下の文、及び練習題四(一六頁)の文に、副詞接續詞があつたら之を指摘し、副詞は何を修飾するかを示せ。

補充問題 三 (第二十一、二十六章)

A 次の文から助動詞を抜き出し、その種類と活用のしかたとを示せ。

- 一 頼朝、高綱に向ひて、「この馬、所望の人數多ありつる中に、舍弟蒲冠者も申しき。殊に梶原源太直參して平ひらに申しつれども、若しもの事あらば乗りて出でんずればとて、遣はなさざりき。その旨を存せられよ。」と仰せければ、高綱畏りて出でにけり。
- 二 さし昇る朝日の如くさわやかに、もたまほしきは心なりけり。
- 三 今日來ずば明日は雪とぞ降りなまし消えずはありとも、花と見ましや。
- 四 あはれ、院は隱岐に遷されさせ給ひぬ。
- 五 白河樂翁公、年十二にて田安邸にありし頃、麻布鳥居坂の戸川内膳の邸宅より火起り、大火といふにあらざれども、焼死せし者多かり

しかば、この火事は人の命をとりぬ坂これより上のとがはないぜん」と落首せる者ありけり。近侍の人々、いかにもよく詠みたり。と評し合ひけるを君聞き給ひて、「余が詠まんには、さ言はじ」とありければ、人々、さらば何とか詠ませ給ふ」と問ひ參らするに、第四の句を「怪我の事なり。」とすべきなり。」と仰せらる。一句にて一首の意味を全く顛倒せしめ、過のやみ難きに出づるを明かにせられしは、誠に驚くべきなり。

- B Aの各文から助動詞を抜き出し、その種類を示せ。
- C 練習題八(三六頁)のB、及び練習題九(四二頁)から助動詞と助詞とを抜き出し、その種類を示せ。

補充問題 四 (第二十一、二十四章)

次の文を成分に分ち、その成立を説明せよ。

- 一 善人榮え、悪人滅ぶ。
- 二 水は低きに就く。

- 三 これは珍しき品なり。
- 四 汝も缺席せりや。
- 五 枯れたるは松のみなり。
- 六 軽きは上に昇り、重きは下に降る。
- 七 母を慕ふは幼兒の常なり。
- 八 恩賜の御衣今ここにあり。
- 九 すは、かなたの森蔭より敵の押寄するぞ。
- 一〇 いかにも源太殿御邊は一方の大將にあらずや。
- 一一 敵に後を見するが如き臆病者は、味方には一人もなきぞかし。
- 一二 中空にかかれる月影清くさやけし。

補充問題

五 (第二十五章)

- A 次の文は構造上如何なる種類に属するかを述べ、また節を含むものは、その節の種類を述べよ。
- 一 怠らず勉むる者は、必ず成功す。

- 二 死を忘るゝ人の、養生を怠るこそをかしけれ。
 - 三 義は金鐵よりも堅く、死は鴻毛よりも軽し。
 - 四 前進する味方と見えし一隊は、近づき見れば、敵の退却するなりき。
 - 五 先生は、晝は衆人と共に武を講じ、夜は燈下に書を讀まれたり。
 - 六 君はこれに賛成すとも、余は断じて同意せじ。
 - 七 家貧しき者は、却つてその志固し。
 - 八 敵は堅固なる城壁に據りて頑強に抵抗したれども、わが軍は忽ち之を撃破したり。
 - 九 皇軍の快速なる進撃は、何人も驚歎するところなり。
 - 一〇 わが軍紀の厳正なるは、第三國人も之を疑はず。
- B 練習題四(一六頁)の文の構造の種類をいひ、また節を含むものは、その節の種類を述べよ。
- C 次の文に誤があつたら正し、その理由を述べよ。
- 一 かゝる盛代に生れあひたるぞ嬉しけれ。

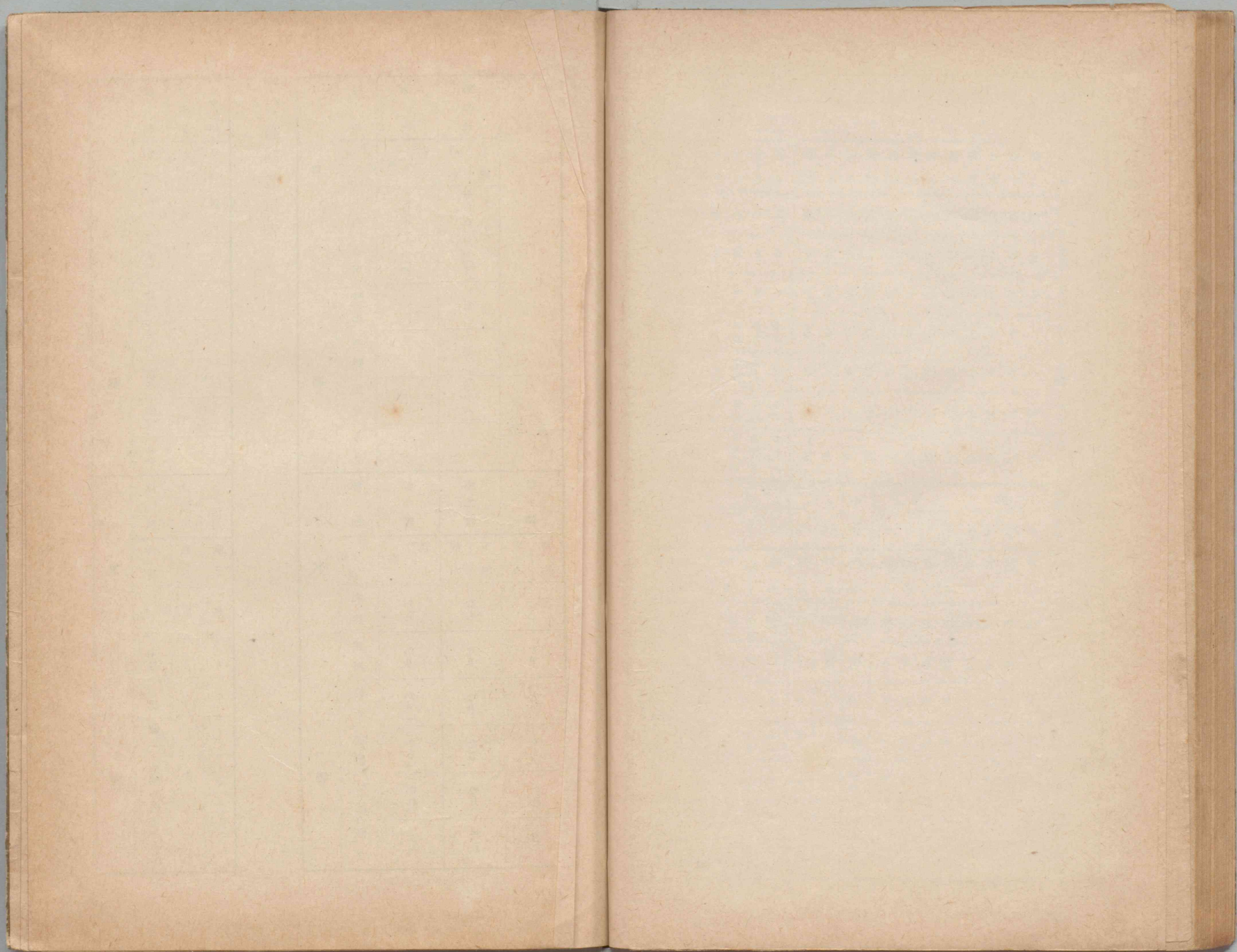
【第一表】
動詞活用表

一 下		段 一 上					段 四					種類																								
ダ タ ザ サ ガ カ ア		ワ	ラ	ヤ	マ	バ	ハ	ナ	ダ	タ	ザ	ガ	カ	ラ	マ	バ	ハ	ナ	タ	サ	ガ	カ	行名													
出	捨	交	失	投	受	得	居	懲	悔	射	試	見	延	強	干	煮	恥	落	案	過	生	着	例													
づ	ず	ず	ず	ず	ず	ず	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	語													
出	捨	交	失	投	受	得	(居)	(懲)	(悔)	(射)	(試)	(見)	(延)	(強)	(干)	(煮)	(恥)	(落)	(案)	(過)	(生)	(着)	例													
で	て	ぜ	せ	げ	け	え	る	り	い	み	み	び	ひ	ひ	に	ぢ	ち	じ	ぎ	き	き	未然														
で	て	ぜ	せ	げ	け	え	る	り	い	み	み	び	ひ	ひ	に	ぢ	ち	じ	ぎ	き	き	連用														
で	る	ぜ	る	せ	る	げ	る	る	い	る	み	る	び	る	ひ	る	ぢ	る	ち	る	じ	終止														
で	る	ぜ	る	せ	る	げ	る	る	い	る	み	る	び	る	ひ	る	ぢ	る	ち	る	じ	連語														
で	れ	ぜ	れ	せ	れ	げ	れ	れ	り	い	み	み	び	ひ	に	ぢ	ち	じ	ぎ	き	き	假定														
で	よ	ぜ	よ	せ	よ	げ	よ	れ	り	い	み	み	び	ひ	に	ぢ	ち	じ	ぎ	き	き	命令														
(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)														
二 下		段 二 上					段 一 上					種類																								
ダ タ ザ サ ガ カ ア		ラ	ヤ	マ	バ	ハ	ダ	タ	ガ	カ	ワ	ヤ	マ	ハ	ナ	カ	ラ	ナ	マ	バ	ハ	タ	サ	ガ	カ	カ	ラ	ナ	マ	バ	ハ	タ	サ	ガ	カ	行名
出	捨	交	失	投	受	得	居	懲	悔	恨	延	強	恥	落	過	生	居	射	見	干	煮	着	例													
づ	ず	ず	ず	ず	ず	ず	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	語													
出	捨	交	失	投	受	得	(居)	(懲)	(悔)	(恨)	(延)	(強)	(恥)	(落)	(過)	(生)	(居)	(射)	(見)	(干)	(煮)	(着)	例													
で	て	ぜ	せ	げ	け	え	り	い	み	び	ひ	ぢ	ち	ぎ	き	き	け	ら	な	ら	ま	ば	は	た	さ	が	か	か	未然							
で	て	ぜ	せ	げ	け	え	り	い	み	び	ひ	ぢ	ち	ぎ	き	き	け	り	に	り	み	び	ひ	ち	し	ぎ	き	き	連用							
づ	つ	ず	ず	ず	ず	ず	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	ける	り	ぬ	る	む	ぶ	ふ	つ	ず	ぐ	ぐ	終止								
づ	つ	ず	ず	ず	ず	ず	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	ける	る	ぬ	る	む	ぶ	ふ	つ	ず	ぐ	ぐ	連語								
づ	れ	ず	れ	せ	れ	ぐ	れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ	け	れ	ぬ	れ	め	べ	へ	て	せ	げ	け	已然								
で	よ	ぜ	よ	せ	よ	げ	よ	れ	り	い	み	み	び	ひ	に	ぢ	ち	じ	ぎ	き	き	命令														
(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)		

口 語 文 語

動詞活用表

サカ	カ	段 一 下										段 一 上										段 四				種類																																
		ワ	ラ	ヤ	マ	バ	ハ	ナ	ダ	タ	ザ	サ	ガ	カ	ア	ワ	ラ	ヤ	マ	バ	ハ	ナ	ダ	タ	ザ		ガ	カ	ラ	マ	バ	ハ	ナ	タ	サ	ガ	カ																					
爲	來	植	流	越	染	述	教	連	出	捨	交	失	投	受	得	居	懲	悔	射	試	見	延	強	干	煮	恥	落	案	過	生	着	蹴	有	乘	踏	飛	問	死	打	害	貸	騒	聞	口														
(爲)	(來)	植	流	越	染	述	教	連	出	捨	交	失	投	受	得	(居)	(懲)	(悔)	(射)	(試)	(見)	(延)	(強)	(干)	(煮)	(恥)	(落)	(案)	(過)	(生)	(着)	蹴	有	乘	踏	飛	問	死	打	害	貸	騒	聞	語														
し	こ	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	ゐ	り	い	み	み	び	ひ	ひ	に	ち	ち	じ	ぎ	き	き	ら	ら	ら	ま	ば	は	な	た	さ	さ	が	か	未然															
し	き	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	ゐ	り	い	み	み	び	ひ	ひ	に	ち	ち	じ	ぎ	き	き	り	り	り	み	び	ひ	に	ち	し	し	ぎ	き	連用															
す	く	ゑ	る	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	ゐ	る	い	る	み	る	び	る	ひ	る	に	ち	る	じ	る	ぎ	る	き	る	る	る	る	む	ぶ	ふ	ぬ	つ	す	す	ぐ	く	終止											
す	く	ゑ	る	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	ゐ	る	い	る	み	る	び	る	ひ	る	に	ち	る	じ	る	ぎ	る	き	る	る	る	る	む	ぶ	ふ	ぬ	つ	す	す	ぐ	く	連體											
す	れ	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	ゐ	れ	い	れ	み	れ	び	れ	ひ	れ	に	ち	れ	じ	れ	ぎ	れ	き	れ	れ	れ	れ	め	べ	へ	ね	て	せ	せ	げ	け	假定											
し	こ	ゑ	よ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	ゐ	り	い	よ	み	よ	び	よ	ひ	よ	に	ち	よ	じ	よ	ぎ	よ	き	よ	れ	れ	れ	め	べ	へ	ね	て	せ	せ	げ	け	命令											
ろ	い	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)	(ろ)																						
サカ	カ	段 二 下										段 二 上					段 一 上		段 下	段 四				種類																																		
變	變	ワ	ラ	ヤ	マ	バ	ハ	ナ	ダ	タ	ザ	サ	ガ	カ	ア	ラ	ヤ	マ	バ	ハ	ダ	タ	ガ		カ	ワ	ヤ	マ	ハ	ナ	カ	カ	變	變	ラ	マ	バ	ハ	タ	サ	ガ	カ																
爲	來	植	流	越	染	述	教	連	出	捨	交	失	投	受	得	懲	悔	恨	延	強	恥	落	過	生	居	射	見	干	煮	着	蹴	有	死	乘	踏	飛	問	打	貸	騒	聞	文																
(爲)	(來)	植	流	越	染	述	教	連	出	捨	交	失	投	受	得	懲	悔	恨	延	強	恥	落	過	生	(居)	(射)	(見)	(干)	(煮)	(着)	(蹴)	有	死	乘	踏	飛	問	打	貸	騒	聞	語																
せ	こ	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	り	い	み	び	ひ	ち	ち	ぎ	き	ゐ	い	み	ひ	に	き	け	ら	な	ら	ま	ば	は	た	さ	が	か	未然																
し	き	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	り	い	み	び	ひ	ち	ち	ぎ	き	ゐ	い	み	ひ	に	き	け	り	に	り	み	び	ひ	ち	し	ぎ	き	連用																
す	く	う	る	ゆ	む	ぶ	ふ	ぬ	づ	つ	ず	す	ぐ	く	う	る	ゆ	む	ぶ	ふ	づ	つ	ぐ	く	ゐ	る	み	る	に	き	ける	り	ぬ	る	む	ぶ	ふ	つ	す	ぐ	く	終止																
す	く	う	る	ゆ	む	ぶ	ふ	ぬ	づ	つ	ず	す	ぐ	く	う	る	ゆ	む	ぶ	ふ	づ	つ	ぐ	く	ゐ	る	み	る	に	き	ける	る	ぬ	る	む	ぶ	ふ	つ	す	ぐ	く	連體																
す	れ	う	れ	ゆ	む	ぶ	ふ	ぬ	づ	つ	ず	す	ぐ	く	う	る	ゆ	む	ぶ	ふ	づ	つ	ぐ	く	ゐ	れ	み	れ	ひ	に	き	けれ	れ	ぬ	れ	め	べ	へ	て	せ	げ	け	已然															
せ	こ	ゑ	よ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	り	い	み	び	ひ	ち	ち	ぎ	き	ゐ	い	み	ひ	に	き	け	れ	ぬ	れ	め	べ	へ	て	せ	げ	け	命令																



〔第一表〕

形容詞活用表

種 類		例 語		種 類	例 語
(ク活用)	高 い	高 い	高 い		
新	新	新	新	種 類	例 語
新	新	新	新	語 尾	語 尾
新	新	新	新	未 然	未 然
新	新	新	新	連 用	連 用
新	新	新	新	終 止	終 止
新	新	新	新	連 體	連 體
新	新	新	新	假 定	假 定
新	新	新	新	命 令	命 令
新	新	新	新	種 類	例 語
新	新	新	新	語 尾	語 尾
新	新	新	新	未 然	未 然
新	新	新	新	連 用	連 用
新	新	新	新	終 止	終 止
新	新	新	新	連 體	連 體
新	新	新	新	假 定	假 定
新	新	新	新	命 令	命 令

形容動詞活用表

種 類		例 語		種 類	例 語
新	高	新	高		
新	新	新	新	種 類	例 語
新	新	新	新	語 尾	語 尾
新	新	新	新	未 然	未 然
新	新	新	新	連 用	連 用
新	新	新	新	終 止	終 止
新	新	新	新	連 體	連 體
新	新	新	新	假 定	假 定
新	新	新	新	命 令	命 令
新	新	新	新	種 類	例 語
新	新	新	新	語 尾	語 尾
新	新	新	新	未 然	未 然
新	新	新	新	連 用	連 用
新	新	新	新	終 止	終 止
新	新	新	新	連 體	連 體
新	新	新	新	已 然	已 然
新	新	新	新	命 令	命 令

比況	定指	謙	敬	望希	量	推
	です だ	ます	られる	たい	まい	よう う らしい
	でせ だら	ませ	られ			
	でし だつ	まし	られ	たく		らしく らしい
	です だ	(ます)	られる	たい	まい	よう う らしい
	(な)	(ます)	られる	たい	(まい)	(よう) (う) らしい
	なら	ますれ	られ	たけれ		
		(まし)				
	形容詞連體形	連用	受身のレル、ラレルに同じ	連用	終止(四段) 未然(右以外)	終止 未然(四段) 未然(右以外)
ことし	たり なり	しむ	さす	る	まほし	たし めり まし じ まじ べし けむけん らむけん む(ん)ず む(ん)
ことく	たら なら	しめ	させ	られ	まほしく	たく まじ べし けむけん らむけん む(ん)ず む(ん)
ことく	たり なり	しめ	させ	られ	まほしく	(めり) まじ べし けむけん らむけん む(ん)ず む(ん)
ことし	たり なり	(しむ)	(さす)	る	まほし	めり まし じ まじ べし けむけん らむけん む(ん)ず む(ん)
ことき	たる なる	(しむる)	(さする)	る	まほしき	める まし (じ) まじき べき けむけん らむけん む(ん)ず む(ん)
	たれ なれ	(しむれ)	(さすれ)	られ	まほしまれ	めれ ましか (じ) まじけれ べけれ け らめ む(ん)ず む(ん)
	たれ なれ		られよ	れよ		
はが	用言の連體文	連體	助動詞に同じ	連用	終止(ラ變は) 未然	終止(連體) 未然

○口語の「なす」「たす」「らし」は、第一種形容動詞と同じ活用をする事が出来る。

37. ○文語の「べし」「まし」「たし」「まほし」は、第一種形容動詞と同じ活用をする事が出来る。

〔第三表〕
助動詞活用表

比況	定指	謙	敬	望希	量	推	了完び及去過		消打	役使	能可	身受	種類
							〔了完〕	〔去過〕					
	です	ます	られる	たい	まい	よう	た		ぬ	させる	られる	受身のレ、ラ	語
	でせ	ませ	られ				たら			させ	られ	未然(四段)	未然
	でし	まし	られ	たく				ず	なく	させ	られ	連用	連用
	です	ます	られる	たい	まい	よう	た	ぬ	ぬ	させる	られる	終止	終止
	(な)	ます	られる	たい	(まい)	(よう)	た	ぬ	ぬ	させる	られる	連體	連體
	なら	ますれ	られ	たけれ			たら	ぬ	なければ	させ	られ	假定	假定
		ませ								させろ	られよ	命令	命令
	形容詞連體形	連用	受身のレ、ラ レルに同じ	連用	終止(四段) 未然(右以外)	終止(四段) 未然(右以外)	連用	未然	未然	未然(右以外)	受身のレ、ラ レルに同じ	接續	接續

ことし	たり	なり	しむ	さす	す	らる	まほし	たし	めり	まし	じ	まじ	べし	む(ん)ず	む(ん)	らし	り	たり	つ	ぬ	けり	き	ざり	ず	しむ	さす	す	らる	る	らる	る	語
ことし	たり	なり	しむ	さす	す	らる	まほし	たし	めり	まし	じ	まじ	べし	む(ん)ず	む(ん)	らし	り	たり	つ	ぬ	けり	き	ざり	ず	しむ	さす	す	らる <td>る</td> <td>らる</td> <td>る</td> <td>語</td>	る	らる	る	語
ことし	たら	なり	しめ	させ	せ	られ	まほしく	たく	(ませ)	まじく	まく	む(ん)ず	(らし)	む(ん)	(ら)	たり	ぬ	ざり	しめ	させ	られ	れ	らる	る	らる	る	らる	る	らる	る	らる	未然
ことし	たり	なり	しめ	させ	せ	られ	まほしく	たく	(めり)	まじく	まく	む(ん)ず	(らし)	む(ん)	(ら)	たり	ぬ	ざり	しめ	させ	られ	れ	らる	る	らる	る	らる	る	らる	る	連用	
ことし	たり	なり	(しむ)	(さす)	(す)	らる	まほし	たし	めり	まし	じ	まじ	べし	む(ん)ず	む(ん)	らし	り	たり	つ	ぬ	けり	き	(ざり)	ず	しむ	さす	す	らる <td>る</td> <td>らる</td> <td>る</td> <td>終止</td>	る	らる	る	終止
ことし	たる	なる	(しむる)	(さする)	(する)	らる	まほしき	たき	める	まし	(じ)	まじき	べき	む(ん)ず	む(ん)	(らし)	る	たる	つる	ぬる	ける	し	ざる	ぬ	しむる	さする	する	らる <td>る</td> <td>らる</td> <td>る</td> <td>連體</td>	る	らる	る	連體
	たれ	なれ	(しむれ)	(さすれ)	(すれ)	らる	まほしけれ	たけれ	めれ	ましか	(じ)	まじけれ	けれ	む(ん)ず	む(ん)	(らし)	(れ)	たれ	つれ	ぬれ	しか	けれ	ざれ	ね	しむれ	さすれ	すれ	らる <td>る</td> <td>らる</td> <td>る</td> <td>已然</td>	る	らる	る	已然
	たれ	なれ				られよ										(れ)	(れ)	(たれ)	(ぬ)			ざれ									命令	
	用言の連體又	連體	助動詞に同じ	受身、使役の助動詞に同じ	連用	連用	終止(ラ變は)	連用	終止(ラ變は)	終止(ラ變は)	終止(ラ變は)	終止(ラ變は)	終止(ラ變は)	終止(ラ變は)	終止(ラ變は)	終止(ラ變は)	連用	連用	連用	連用	連用	連用	連用	連用	連用	連用	連用	連用	連用	連用	接續	

○口語の「ない」「たい」「らしい」は、第一種形容動詞と同じ活用をする事が出来る。

○文語の「べし」「まし」「たし」「まほし」は、第一種形容動詞と同じ活用をする事が出来る。

—
(量
まい (四段以外に)
—

—
(量
まい (四段に)
—

—
(量
—

—
(量
—

口語助動詞接續表

未然形に	連用形に	終止形に	終止形に	動詞以外に
(身受) れる (四段に) られる (四段以外に) (サ變は「される」とも)				形容詞終止形に
(能可) れる (四段に) られる (四段以外に) (サ變は「される」とも)				體言又は助詞ノに
(役使) せる (四段に) させる (四段以外に) (サ變は「させる」とも)				
(消打) ぬ (サ變は「し」に) ぬ (ん) (サ變は「せ」に)				
(量推) よう (四段以外に) まい (サ變は「し」に) まい (四段以外に) (サ變は「し」に)	(及去過) た (サ行以外の四段は音便形に)			
(讓敬) れる (四段に) られる (四段以外に)	(讓敬) ます			
	(望希) たい たがる			
		(量推) らしい まい (四段に)		
			(量推) らしい	
				(定指) です
				(定指) です

○指定の「だら」「ウ」「なら」「せ」「ウ」は動詞の終止形にも連る。

文語助動詞接續表

未然形に	連用形に	終止形に	連體形に	已然形に	動詞以外に
(身受) る (四段ナ變ラ變 に) らる (右以外に)					體形容詞連體言に
(能可) る (四段ナ變ラ變 に) らる (右以外に)					助詞ノガに
(役使) す (四段ナ變ラ變 に) さす (右以外に) しむ					
(消打) ず ざり					
了完び及去過 了 [了] 完 [完] 去 [去] 過 [過] りサ變に)	了完 [完] 去過 [去] たりつぬけり (音便形にも)			[了] [完] に四段	
(望希) まほし	(望希) たし				
(量推) む (ん) むず (んず) まし	(量推) けむ (けん)	(量推) らし (ラ變以外に) らむ (らん)	(量推) らし (ラ變) らむ (らん)		
		(量推) べし (ラ變以外に) まじ (ラ變以外に) めり (ラ變以外に)	(量推) べし (ラ變) まじ (ラ變) めり (ラ變)		
					(定指) なり
					(定指) なり
					(定指) たり
					(況比) ごとし

○(敬讓)のる、らるは(可能)のと同じく、又(敬讓)のす、さす、しむは(使役)のと同じ。
○きはカ變には「こし」「ごしか」又は「きし」「さしか」と連る。サ變には「しき」「せし」「せしか」と連る。

文語助詞接續表

		(第一種) のがをにへとよりにて	體 言 に
なむ(なん) はや に	(第三種) な(カ變サ變)	(第二種) ては	未 然 形 に 用
な(カ變サ變 以外に)	(第三種) な(カ變サ變 以外に)	(第二種) て(音便形にも) つ とも(形容詞に)	連 用 形 に
や	(第三種) な(ラ變以外に)	(第二種) とも(動詞に)	終 止 形 に
よぞか かな(形容詞は音 便形にも)	(第三種) な(ラ變に)	(第二種) をにが	連 體 形 に
		(第一種) のがをにへとよりにて	に 已 然 形 に
		(第二種) どは ども	

〔第五表〕

口語助詞接續表

體言に		(第一種) がのをへにとりて	體言に		(第一種) がのをへにとりて
未然形に	用		未然形に	用	
連用形に	言		連用形に	言	(第二種) て (サ行以外の四段は音便形に) ても (同前) たり (同前) ながら (動詞に)
終止形に	言		終止形に	言	(第二種) と けれど(も) が のに から し ながら(形容詞に)
連體形に	言	(第一種) がのをへにとりて	連體形に	言	(第二種) ので のに
已然形に	言		已然形に	言	(第二種) は
					(第三種) な
					(第三種) の

文語助詞接續表

體言に		(第一種) がのをへにとりて	體言に		(第一種) がのをへにとりて
未然形に	用		未然形に	用	
連用形に	言		連用形に	言	
終止形に	言		終止形に	言	
連體形に	言	(第一種) がのをへにとりて	連體形に	言	
已然形に	言		已然形に	言	
					(第二種) は
					(第二種) は

〔第五表〕
口語助詞接續表

		(第一種) がのをへにかより て	體 言 に
			未 然 形 に
			連 用 形 に
		(第二種) て (サ行以外の 四段は音便 形に) ても(同前) たり(同前) ながら(動詞に)	終 止 形 に
		(第二種) と けれど(も) が のに から し ながら(形容詞に)	連 體 形 に
		(第二種) は	假 定 形 に
			に

文語助詞接續表

		(第一種) がのをへにとより にて	體 言 に
			未 然 形 に
		(第二種) ては	連 用 形 に
		(第二種) とも(形容詞に) つ て音便形にも	終 止 形 に
		(第一種) がのをへにとより にて	連 體 形 に
		(第二種) は ども	假 定 形 に
			に

用

言

に

言

に

(第三種)
な一そ(カ變サ變
に)
はや
なむ(なん)

(第三種)
な一そ(カ變サ變
以外に)

(第三種)
な(ラ變以外に)
や

(第三種)
かな(形容詞は音
便形にも)
よぞか

昭和十三年十二月六日 印刷
 昭和十三年十二月九日 發行
 昭和十四年一月十七日 訂正再版印刷
 昭和十四年一月二十日 訂正再版發行

改新文典 上級用
 定價金六十錢



著者	橋本進吉
發行者	東京市神田區神保町一丁目三番地 會社 富山房
代表者	同所 富山房社長 坂本守正
印刷所	東京市京橋區木挽町三丁目十一番地 新井電新堂

發行所

東京市神田區神保町一丁目三番地
會社 富山房

電話神田二一七一—八
 振替口座東京五〇一番

去島中
 川東道之

